

『心王經』の復元

— 漢文斷片とソグド語譯に基づいて —

伊 吹 敦

はじめに

私は、先に、一文を草して、『心王經』という偽經が、初期禪宗の内部で、しかも、五祖弘忍の周邊で作られたものであり、初期禪宗史の展開を辿る上で極めて重要な資料であることを明らかにするとともに、現存する諸資料に基づいて、その本文をでき得る限り復元しようと試みた（「『心王經』について—ソグド語譯された禪宗系偽經—」〈「駒澤大學禪研究所年報」第四號〉）。その復元は、漢文の形で現存する冒頭部、諸文献に引用された逸文と、ソグド語譯からの還元漢文に基づいて行われたものであるが、ただ、そこでは、紙幅の関係もあって、復元した本文を示すに止め、その根拠を示すことはできなかった。従って、読者が、その本文を信頼し、また自づからの研究の依據とすることに躊躇を感じるのも當然のことであつたであろう。そこで、私は、ここに、その復元の根拠——それは、漢文原文が残っている部分については、諸本の對校とそれに対する自づからの判斷を示すことであり、ソグド語でしか残っていない部分については、その還元の根拠を示すことである——を公表することで、読者が、その信用性を測る材料を提供するとともに、個々の問題に対する諸賢の批判を仰ぎ、よりよい復元本文を作るための礎石としたいと考えた。この經典をよりよく理解することは、初期禪宗史の展開をいかに捉えるか、ということと直結する問題であるから、この復元の作業も、出來得る限り完全なものに近付けなければならない性格のものであると考えられる。私は、そのため、膨大な時間を費して、それを実行したのである。今、ここに掲げるのは、その結果であり、私の現時点での能力の限界を示すものである。甚だささやかなものであるが、この復元本文が、禪宗史の解明に少しでも役立つことができれば幸いである。

なお、この復元本文に基づいて、その思想を論じた拙論、「『心王經』の思想について」が同じ雑誌に掲載されているので、併せて参照されたい。

凡 例

『心王經』の諸本や、その研究史、ソグド語譯と漢文冒頭部との関係などについては、既に、前掲の拙論に論じておいたので、繰返しは避け、ここでは、先づ、復元した本文を、段落に分けて示し、その根拠を、各段落ごとに、註記の形で示すことにする（この段落は、拙論「『心王經』の思想について」の段落と對應する）。

テキストについては、漢文で残っている部分については、それぞれの部分ごとに明記したが、ソグド語譯の部分は、

D. N. MacKenzie, The Buddhist Sogdian Texts of the British Library, Acta Iranica 10 Téhéran-Liège, 1976, pp. 33-51.

に基づいた。

マッケンジーのこの著書は、大英博物館のソグド語佛教文獻を網羅し、英譯、NOTES、グローサリーを完備したもので、ソグド語からの還元の際には、極めて有益なものであった。以下の註記において、「マッケンジー」として言及されるものは、全て、この書に掲載された英譯、あるいはNOTES、GLOSSARYの部分である。また、『維摩經』や『觀佛三昧海經』などのソグド語譯への参照も、全て、これに基づくものである。

註記の部分には、例文として種々の文獻からの引用がなされているが、それらについては、それぞれの部分に出典を明記した。ただ、出典、出處については、以下の略號を用いた。

大正藏 大正新脩大藏經
續藏 大日本校訂續藏經

Benv. E. Benveniste, 'Notes sur les textes sogdiens bouddhiques du British Museum', Journal of the Royal Asiatic Society, London, 1933, pp. 33-44.

Demi. E. Benveniste, P. Demiéville, 'Notes sur les fragment sogdiens du Buddhadyānasamādhisāgarasūtra' Appendice I, Journal Asiatique, Paris, 1933, pp. 239-241.

吉田1 吉田豊「ソグド語の『究竟大悲經』について」(「アジア・アフリカ言語文化研究」二七、七六～九四頁。東京外國語大學、アジア・アフリカ言語文化研究所、一九八四年)

吉田2 吉田豊「大谷探検隊將來中世イラン語文書管見」(「オリエント」二八—二、五〇～六五頁。一九八五年)

また、次に掲げる、頻出する諸文獻については、使用したテキストをここに掲げ、本文の註においては、頁數のみを示すことにする(なお、寫本については、頁數を示すことができないので、文獻名のみの表示となる)。

『佛說法王經』	「大正新脩大藏經」第八五卷所収本。『法王經』と略稱する。
『佛性海藏智慧解脫破心相經』	同上。『佛性海藏經』と略稱する。
『心王經』惠辯禪師註	同上。『心王經註』と略稱する。
『傳法實紀』	「禪の語録2、初期の禪史I」(筑摩書房刊)所収本。

『楞伽師資記』

同上。

『大日經義釋』

「續天台宗全書〈密教1〉」（春秋社刊）所収本。

『金剛般若經註』

敦煌本。スタイン二五一一號を底本にペリオ二二一六號を對校。

『觀世音經讀』

敦煌本。北京本六二八〇號（兩五一）。

なお、上に掲げた、『金剛般若經註』と『觀世音經讀』は、金剛藏菩薩撰とされるものであり、これについては、拙稿「北宗禪の新資料—金剛藏菩薩撰とされる『觀世音經讀』と『金剛般若經註』について—」（『禪文化研究所紀要』第一七號）を参照されたい。

復元本文

A、漢文殘存部分

（スタイン二四七四號を底本にペリオ二〇五二號を校合）

【〇】

佛爲心王菩薩說頭陀經⁽¹⁾

（1）スタイン本、ペリオ本ともに、「投」に作る。また、『曹溪大師別傳』も、「投陀經」と呼ぶが、『大周刊定衆經目錄』『導凡趣聖心決』『止觀輔行傳弘決』などは、「頭陀經」と呼んでいる。「頭陀」の「頭」を、「かしら」の意味に解すという、その内容からすれば、當然、「頭」でなくてはならないので、ここでは改めた（これについては、前掲の拙論「『心王經』について—ソグド語譯された禪宗系偽經—」を参照せよ）。

【一】

爾時。佛在大林菴山。山形大小。縱廣八萬四千由延。其山四方。有無量夜叉羅刹。虎狼師子。毒蛇惡鬼。殺害衆生。噉人精氣。其山四維。有無量賢善大士⁽¹⁾。脩學大乘。於佛法中。決定生信。護持禁戒。如淨明珠。守護心城。摧伏外道。五峰神仙。最居山頂。仙人我慢。五欲自恣。不悟無常。佛與迦葉。諸大菩薩。側塞虛空。前後圍繞。四部弟子。一時共會。

（1）「學」、ペリオ本は「覺」に作る。

【二】

爾時世尊。在大衆中。坐寶蓮華。結跏趺坐。嬉怡微笑。威德光明。普照一切。佛告心王菩薩。汝當爲諸大衆。宣說甚深無上妙法。令諸衆生。識煩惱性。空無所有。令頭陀⁽¹⁾
⁽²⁾正法。苦樂一相。

(1) 「頭」、スタイン本、ベリオ本、共に「投」に作る。【○】の註1参照。

(2) 「正」、スタイン本、ベリオ本、共に「一心」に作る。しかし、これが、「正」という一字が二字に書き誤られたものであることは文脈より明らかである。

【三】

心王菩薩。承佛神力。身昇虛空。變現自在。於大衆中。放大智光。光如百千萬億日月。清涼調適。隨諸衆生。所求皆得。普照十方。招集有緣。諸來大衆。天龍八部。護法善神。天王等。上至有頂。下極空際。六道死生。蒙光喜悅。大衆雲集。

【四】

菩薩摩訶薩。大慈所薰。復放六百萬億。最勝光明。其光明中宣說。一切衆生。本性清⁽¹⁾
淨。無生無滅。無垢無淨。無生死際。無涅槃際。⁽²⁾二際平等。⁽³⁾諸法空故。閑居靜住。即⁽⁴⁾
是頭陀。寂然念道。絕斷攀緣。不生分別。何以故。以生死涅槃。不一不二。俱假名說。⁽⁵⁾
佞引愚夫。上品衆生。體達法相。不入涅槃。⁽²⁾不出生死。中品衆生。貪求涅槃。⁽⁶⁾無方便⁽⁷⁾
慧。實際爲家。下品衆生。無明癡住。不覺不知。沈淪苦海。

(1) 「清」、ベリオ本になし。

(2) スタイン本、「槃」を「盤」に作る。今、改む。下、同じ。

(3) 「諸」の上、スタイン本、ベリオ本、共に「等」の字あり。衍字と見て削る。

(4) 「頭」、スタイン本、ベリオ本、共に「投」に作る。【○】の註1参照。

(5) 「佞」の上、スタイン本、ベリオ本、共に「説」の字あり。衍字と見て削る。

(6) 「食」の字、スタイン本になし。『心王經註』のこの部分の註釋に、「貪求涅槃」とあるので補った。

(7) 「慧」、スタイン本、ベリオ本、共に「惠」とするが、「慧」と「惠」とで意味に相違があるわけではないし、書寫に際して區別されていたとも思われない。一般に、「慧」のほうが多く用いられていると思われるので、ソグド語からの還元部分と一致させることも考え併せて、一應、「慧」に改めておく。

【五】

諸菩薩等。汝當諦了。如是光明。從何而來。內外推求。都無生處。從心化生。湛然常一。⁽¹⁾一相光明。觸衆生身。從毛孔入。衆生愚者。入無量定。光觸眼者。⁽²⁾入妙色三昧。光觸耳者。入音聲三昧。光觸鼻者。入香林三昧。光觸舌者。入法喜三昧。光觸身者。入智明三昧。光觸心者。入法明三昧。

(1) 「菩」の上、ペリオ本は「佛」の字があるが、消してある。

(2) 「相」、スタイン本、ペリオ本、共に「想」に作るが、『心王經註』のこの部分に、「一相光明。無處不遍」とあるので、それに據って改めた。

(3) ペリオ本は、「眼」の上に「三」の字があるが、衍字である。

【六】

光遍十方。仙人蒙光。我慢即除。身心清淨。悟無生忍。惡鬼毒蛇。夜叉羅刹。噉人精氣者。皆發菩提心。二見牛頭。閻諍心息。波旬魔王。開地獄門。施清涼水。⁽¹⁾飢餓衆生。⁽²⁾自然飽滿。發清淨心。凜法喜食。身心解脫。深入法性。自在無爲。雖得無爲。察心不住。學方便故。

(1) 「涼」の上、スタイン本、ペリオ本、共に「淨」の字があるが、衍字と見て削る。

(2) 「飢」、ペリオ本には「餓」に作るが、『心王經註』に「名爲飢餓」とあるので、「飢」が正しい。

【七】

以法爲妻。⁽¹⁾化生一子。處在深宮。正念思惟。學大方便。不捨有爲。不住無爲。⁽²⁾二慧方便。念念具足。其年雖小。常樂出家。學無上道。不樂世事。常脩少欲知足之行。脩六和敬。眼與色和。何以故。心不緣色。妄識不生。即是和義。餘如上說。動靜常一。守諍心城。不令賊入。

(1) 「以」、スタイン本、ペリオ本、共になし。今、假に補う。

(2) 「慧」は、スタイン本、ペリオ本、共に「惠」に作るが、今、改める。

【八】

外道六師。多方巧術。詐爲親善。語王子言。世有極樂。⁽¹⁾自恣歡娛。長養王身。既受樂已。天上伎樂。種種饌餽。自然來至。五欲天女。巧轉王心。所求皆得。王子聞已。似悲復喜。我從昔來。只爲愛網。網我身心。不能自拔。何能救他。今日何緣。復作斯語。誑惑於我。

- (1) 「歡」、スタイン本、ペリオ本、共になし。『心王經註』の註釋に、「生死不住。名爲歡娛」とあり、これが『心王經』の本文を受けるものと思われるが、この「歡娛」は、恐らく、「歡娛」の誤りであろうから、「歡」の字を補った。

(中 関)

B、『修心要論』の引用

(スタイン二六六九號、三五五八號、四〇六四號、ペリオ三四三四號、三六六四號、三七七七號、北京本字四、龍谷大學本、禪門撮要本を對校く北京本裳七五、スタイン六一五九號には對應部分なし。オルテンブルクー二七七號は未見)

【九】

⁽¹⁾眞如佛性。⁽²⁾没在知見六識海中。⁽³⁾沈淪生死。不得解脫。

- (1) 「性」の上、龍谷大學本には「没」の字があるが、勿論、衍字である。
(2) 「見」の字、龍谷大學本に脱す。
(3) 「淪」、スタイン二六六九號、四〇六四號、ペリオ三四三四號、三六六四號、北京本字四、龍谷大學本の諸本は、「輪」の字に作るが、意味の上で適當ではない。

(中 関)

C、ソグド語からの還元漢文

(括弧内はソグド語寫本の行數であり、スラッシュ / は行の區切りを示す)

【一〇】

／以善方便。⁽¹⁾□□□□。／□得智力。⁽²⁾□□□□。／動靜不二。⁽³⁾／念□□心。破煩惱相。
 ／得眞實相。⁽⁴⁾出無漏火。⁽⁵⁾／燒煩惱薪。⁽⁶⁾名不動慧。⁽⁷⁾／不動而動。⁽⁸⁾名方便慧。(1-8)

(1) ソグド語は、“cnn ɾwɸ prɾ'npɸ” (善き方便で)。この原語が「以善方便」であつたことは、「以善方便。居毘耶離」(『維摩經』、大正藏一四、五三九上)、「以善方便。能除衆生身見等惑」(『華嚴經』、大正藏一〇、一九〇下)といった表現からして、ほぼ間違いない。

(2) ソグド語は、“wyrmn'w'k 'PZYn "y'wɟt'k prw δw' wkry L' [破損]”で、これと同様の表現は、一〇六行目に、“ZKw ɾwnɸ 't 'mw p'zn prw δw' wkry L' ɟm'rt” (「色心不二」)、また、一九一行目に、“ZK wyrmnɸ 't 'ɾw "ywɾ prw δw' wkry L' βwt” (「動靜不二」)などに見える。従つて、ここでも、破損部の動詞は、“ɟm'rt”、あるいは、“βwt”であつたと考えられる。しかし、いずれの場合でも、「不二」と還元されるべきものであろう。ところで、上に掲げた一九一行目の例に見られる“wyrmnɸ”と“ywɾ”は、それぞれ、ここに見える“wyrmn'w'k” “y'wɟt'k”と同系統の語であるから、その原語は全く同じであつたと考えることができる。従つて、ここで問題とすべきは、“wyrmn'w'k” “wyrmnɸ”、及び、“y'wɟt'k” “ywɾ”という二群の單語の原語である。前者については、一般に、「寂」の譯語として用いられる語で、『心王經』においても、多くの場合、「寂」に還元できる。一方、後者については、ソグド語譯『觀佛三昧海經』の二四一行目において、“ywɾt”が、「亂」の譯語として用いられている。しかし、『心王經』の現存部分に、「動靜常一」(【七】)とあるのを参照して、前者を「靜」、後者を「動」の譯語と見て、「動靜不二」に還元した。なお、『心王經』では、「動」という動詞は、すぐ下に、“wɸt”が使われているが、ここでは、形容詞的な用法であるので、ソグド語譯の譯語に相違がみられるのであろう。

(3) 「破」に当たる部分は、原寫本が破損しているが、前後の文脈から補つた。

(4) 「眞實」の二字に当たる部分は、原寫本が破損しているが、『涅槃經』の「無煩惱相。無煩惱主相。善男子。如是等相。隨所滅。名眞實相」(大正藏一二、六〇三下)などの文を参照すれば、それが「眞實」であつたことは容易に推定される。なお、この「眞實相」、即ち、“m tɸc prɾnh”という言葉は、八九行目、一二一行目に見える。

(5) マッケンジーに従つて、ソグド語の“wɸtɾwɸ sɾɸβt'm zɸɸ”を「煩惱薪」に還元する。なお、この文と類似した表現は、次に掲げのように非常にしばしば見ることができるので、彼の還元には間違いない。

「以慧火燒煩惱薪。令盡無餘之義也」(『大日經義釋』、六三九頁)

「煩惱爲薪。智慧爲火」(同上、二一四頁)

「業煩惱爲薪。方便智爲火」(同上、五四六頁)

「後云。佛告阿難。如來往昔無量無邊阿僧祇劫。以智慧火。燒煩惱薪。修無相定」(『大方廣佛華嚴經疏演義鈔』、大正藏三六、六〇八中～下)

なお、「無漏火」に通ずる表現としては、智誦の『法華玄義』に、「發智火還燒陰。……無漏智火……」(大正藏三三、七〇七下)と見える。

- (6) 原寫本は、この「名」に當たる部分(動詞が入るべきである)を破損している。マッケンジーは、その冒頭部を、“(n)w-”と判讀しているが、文脈から見て、“[r]w[y n t y]”(「名づける」「呼ぶ」の意味)であつたと考えられる。なお、ソグド語譯『心王經』には、この「名づける」「呼ぶ」という意味の語が、二種類用いられているが、文脈から見て、次のように譯し分けられていると考えることができる(なお、括弧内は、ソグド語譯の行數である)。

「名」「名爲」… r w y n t y (8,10,13,16,17,20,44,45,98,100,103,122,
134,162,197,280,284)

「爲」…………… w r s t y (248,254,264,270,277)

- (7) ここに見える「不動慧」(L' w y c' y ʒ n' k h)と、次に見える「方便慧」(p r r' n p y ʒ n' k h)という言葉は、『金剛三昧本性清淨不壞不滅經』に、「六十者。方便慧三昧。……六十六者。不動慧三昧」(大正藏一五、六九八上)と見える。「方便慧」については、先づ、『維摩經』に、「又無方便慧縛。有方便慧解。無慧方便縛。有慧方便解」(大正藏一四、五四五中)という中の「有方便慧解」という言葉に注目すべきである。これは、「大乘五方便」系の諸本には必ず取り上げられている重要な經文であるからである。また、外に、『文殊師利問菩提經』に、「問。六波羅蜜。以何爲本。答言。方便慧爲本」(大正藏一四、四八二中)、『大日經義釋』に、「不應同彼聲聞無方便慧者一向拘局」(五八八頁)、『金剛般若經註』に、「行人雖行波若。無方便慧」などと見えてる。なお、ここで、「慧」と還元した“ʒ n' k h”という單語については、ソグド語譯佛典では、しばしば、「智」の譯語として用いられており、マッケンジーも、ソグド語譯『維摩經』を根據に、“p r r' n p y ʒ n' k h”を「方便智」の譯だと述べる。しかし、「方便慧」という言葉も、上に例を挙げたように、しばしば用いられている上に、本『心王經』においても、「慧藏」という漢語を、“ʒ n' k h p c' n”と譯している(一九三、一九六行目)ことが、原漢文の逸文から知られ、更に、『心王經』の現存部分に、「無方便慧」(【四】)と見えているので、本ソグド語譯では、“ʒ n' k h”は、主として「慧」の譯語と考えるべきである。

- (8) この句の冒頭の「不」に當たる部分は、原寫本が破損しているが、マッケンジー

の説に従った。なお、この「不動而動」という句については、天台智顗の『法華文句』に、「觀心者。正觀心性。中道不動。如城防敵。不動而動。如水淨諸邊顛倒」(大正藏三四、一一下)と見えている。

【一】

心王菩薩⁽¹⁾告⁽²⁾有照菩薩⁽³⁾。爾時。我⁽⁴⁾入於淨海甚深三昧⁽⁵⁾。名法輪慧⁽⁶⁾。不可思議⁽⁷⁾。於煩惱中⁽⁸⁾而佛出生。(8-12)

- (1)「心王菩薩」は、文字通り、“p'z n ɾwt'w pwtystβ”と譯されている。この菩薩は、『金剛三昧經』(大正藏九、三六六上、三六七中～三六八上)や『華嚴經』(大正藏一〇、二一一上、中)に見えており、その影響下にこの經典が成立したことが窺われる。なお、『華嚴經』に、「心王菩薩」が出ていることについては、ドミエヴィルに、既に言及がある(Demi.p240)。
- (2)ここに「告」に還元したソグド語は、“k'w....w'β”である。『心王經』には、この外にも、「説く」「話す」という意味のソグド語がいくつも用いられており、それぞれが、異なる漢語に對應するものと見られる。本還元に当たっては、個々の場合の文脈に沿う形で對應漢語を導き出した。その結果を纏めると次のようになる(括弧内は、ソグド語譯の行數である)。

「説」「宣説」… prβ'yrt (77,90,176,177,205,221),
prβ'y r'n (116,142,238), prβyrt (130),
prβ'y r' (64), prβ'yrt (72,203),
prβ'y r'm (65).
「議」………… prβ'y r't (11), prβ'yrt (294).
「告」………… k'w....w'β (9,222).
NY~W (68,113,140,236).
「言」………… w'β (12,14,43,44,48,51), w'β'm (62),
w'β'y (51), w'βt (178).
「白」………… pt'yǵkwy (134,288).

なお、“prβ'yrt”が、「議」の譯語として用いられるのは、原語が「不可思議」の場合だけである。

- (3)マッケンジーは、“rɾwǵny wn'y pwtystβ”の原語について、あれこれ思案を巡らせているが、それが「有照菩薩」の翻譯であることは、『心王經註』に、「故有照大士。垂音五濁之中。悲愍群生。歡請如來設經邊首」(一四〇一下)という文があることから、全く疑う餘地がない。

- (4) “*rwyz'kw nry*” が「甚深」に還元されることについては、【一五】の註10を参照せよ。
- (5) ソグド語譯では、この三昧を、“*'w* [破損] *sm'wtryh rwyz'kw nry sm'ry*”とする。この破損部については明らかでないが、今、假に、“*'ws'wrtk*” (清らか) と考え、「淨海甚深三昧」と還元した。「淨海」という表現については、『華嚴經疏』に、「離障深廣爲淨海」(大正藏三五、九二二上)と見える。
- (6) “*δrm ckk r zn'kh*” は、「法輪慧」に還元されるが、他に見えない獨特の用語である。
- (7) “*L' sm'rt L' prβ'yrt βwt*” (考えることも解説することもできない) という表現は、二九四行目にも見えるが、その意味から見て、「不思議」という漢文の成句の直譯であることは明白である。
- (8) “*z'y't*” を「出生」に還元した。なお、本還元における、類義語の區別は、以下の通りである(括弧内は、ソグド語譯の行數である)。

- 「生」「出生」…………… *z'y't* (12,41,46,61,194,195,220,250,252),
z'y'y (204).
'nryz't (219).
- 「生」「長」「生長」… *rwδt* (31,35,40,97,154,164,172,257,259).
- 「出」…………… *nyz'y't* (6,26,261), *nyzy'y* (274).
- 「起」…………… *mnrz* (109,225,227), *'nryz't* (256),
'nryz't (219)
ptrz't (219).
- 「生起」…………… *zrrwβsty* (257).
- 「成」「成就」…………… *'spt'k* (183,192,196,266),
'sptk (244,266).

【一二】

有照菩薩言。如何／名方便慧。如何／不動慧。如何法輪慧。(12-14)

【一三】

答言。六識⁽¹⁾／常動。猶如車輪⁽²⁾。／名方便慧。心王常住不動。／猶如車軸⁽³⁾。名不動慧。
 ／一根⁽⁴⁾是六根。六六三十六⁽⁵⁾。／計如車輻⁽⁶⁾。名法輪／慧。識五陰車⁽⁷⁾。／空無所有。令一心牛⁽⁸⁾。普度衆生。(14-22)

- (1) ソグド語は、“rw 'rwšw wkry ptz'n p'zn”であり、マッケンジーは、“rw 'rwšw wkry ptz'n”を「六識」のことだとするが、“p'zn”を含めた全体を「六識」の譯語と見るべきである。
- (2) ここの車輪の譬喩と類似したものを、次のように、『大日經義釋』のなかに見ることができる。「雖如是垂迹無窮無盡。然實常住不動。亦無起滅之相。猶如車輪雖復運轉無窮。而樞中未嘗動搖」(四九二頁)。
- (3) ソグド語譯の“'wyn rr'kyh ZK 'ntβwrtk”については、その意味が明らかでないが、『大乘心行論』に、「心如車軸者。車行軸如不動。心亦如是。心常不動。……心性不動。喻如車軸」(ペリオ三六六四號)とあるのによれば、「車軸」のことと見ることができる。恐らく、“rr'kyh”が車輪を、“'ntβwrtk”が軸を意味するのであろう。すぐ上に「車輪」が出て来たが、こちらのソグド語は、“'myn wrtny ZKh srrh”で、これは「馬車」(wrtny)の「輪」(srrh)の意味。従って、“rr'kyh”は車輪自体を意味するものと思われる。しかし、原漢文では、“wrtny”も“rr'kyh”も、その原語は、「車」という同じ單語であったと思われる。
- (4) ソグド語は“'myn 'yw wkry wyry ZK wrwšw βwt”で、「六根」の「根」に相當するものがないが、『心王經註』に、「若韻音。六根是一根故。名爲法明三昧」(一四〇三上)とあるのを参照して補った。
- (5) これに類似した表現として、『大方廣佛華嚴經疏』の「而要言三十六者。顯已過前六位。位位具修六度。六六三十六。皆是恒沙性德。故云爾耳」という文を挙げることができる。
- (6) ソグド語の“'myn rr'ky ZK kywny'”についても、その意味は不明であるが、上に見たように、“rr'ky”は、「車輪」の意と見られる。ここでは数が多いことが問題とされているので、恐らく、スポーク、即ち、「車輻」のことと思われる。但し、既にバンヴェニストも言うように(Benv.p37)、譬喩が必ずしも適當でないで、全体の意味は、必ずしも明確ではない。
- (7) この二句のソグド語は、“rty nwkr ZKw pnc wkry ptr'wδ ry'kh ptšmyrty 'PZY rwnx ZKZY ptk'r'kh nyst”で、その意味が明らかでない。マッケンジーは、“Now the five covers(skandha) are counted as a raxak and (as) that which is not (just) an appearance (?)”と譯しているが、『心王經註』に、「是以。五陰十二入十八界。是一切行人觀之。空無所有」(一四〇二中)とあり、『心王經』の現存部分に、「令諸衆生。識煩惱性。空無所有」(同上、一四〇二中)とあるのを参照し、“rwnx ZKZY ptk'r'kh nyst”を假に、「空

無所有」と還元した。しかし、「不可得」などの譯語である可能性も否定できない。また、ソグド語の“p t ḡ m y r t y”は、「数える」の意であるが、上の『心王經』の文によって、「識」とした。『心王經註』は、「觀」という動詞を用いているが、ソグド語譯『心王經』では、「觀」という動詞は、一般に、“p'y”や“p'y'y”といった言葉で譯されている（【一八】の註1、並びに、【二四】の註6、註7を参照）。

- (8) この二句のソグド語は、“r'w 'PZY ZK 'yw wkry p'zn ZKZY ḡk'rty rty 'mw wyspw w'tδ'r "z'wnt βδ'yzt k'w zn'kh wḡ'wḡ pr'n'y't”である。この意味もはっきりしない。マッケンジーは、“r'w”（「牛」）という言葉と、“r'w”（それ）の誤りとして、前の句に属するとしている。しかし、恐らく、ここの表現は、上の句に、「五陰車」と、「五陰」を「車」に喩えたのに對して、「一心牛」と、「一心」を、その車を牽く「牛」に喩えたものであらうと思われる。ソグド語譯では、“r'w 'PZY ZK 'yw wkry p'zn”と、「牛と一心」という順に掲げられているが、これは、「一心牛」を、「一心」と「牛」の並列と解し、その順序を入れ替えたものではなからうか。そして、恐らく、原文は、「五陰車」と「一心牛」とが對になるような形で、對句を成していたのであらうと推測される。そして、この「一心牛」が、“ḡk'rty rty 'mw wyspw w'tδ'r "z'wnt βδ'yzt k'w zn'kh wḡ'wḡ pr'n'y't”（全ての衆生を慧へと連れていく）というのであるが、ここに出て来る、“k'w zn'kh wḡ'wḡ pr'n'y't”という表現は、“k'w ḡyr pr'n'y't”という、四三行目などに見える表現とよく似ている。この表現が、「度」の意譯であるらしいことは、後に論ずる通りである（【一九】の註12）。従って、私は、ここでも、多少の表現の相違はあるものの、「度」の譯語と見てよいと考える。

【一四】

汝等菩薩。⁽¹⁾／當如是行。衆生常⁽²⁾／從外垢。煩惱障覆。⁽³⁾／不見佛性。猶如燼燼。若不攪之。／則火不出。煩惱之相。亦復如是。／若攪之則。佛性顯現。⁽⁴⁾但要淨⁽⁵⁾／心。若有淨心。淨力淨／慧。從攪而成。（22-29）

- (1) これは、“ḡm'r w pwtystβt”というソグド語の直譯であるが、この呼びかけ方は、實際、『法王經』に、次のように見えている。「汝等菩薩。皆悉一心諦聽。爲汝宣說」（一三八九中）。

(2) この句は、ソグド語の “ZK w't δ'r "z'wnt r'm'nt cnn
 βykp'r-cyk rym” の還元であり、「從」が“cnn”に当たるわけであるが、“cnn”は、英語の“from”に当たる副詞であるから、マッケンジーは、動詞を缺落していると見て、“the living creatures always (verb missing) from the external filth”と譯している。しかし、この文をそのまま還元した文である「衆生常從外垢」の「從」は、副詞ではなく、明らかに動詞であり、この文は、漢文として、完全なものとなっている。つまり、譯者は、この「從」という動詞を副詞と誤解して、そのままソグド語に直してしまったと考えられるのであり、その結果、ソグド語としては、動詞を缺く不完全な文となってしまったのである。この事實は、この還元の正しさを示すものであるとともに、ソグド語譯が、いかに原漢文に忠實であるかを物語るものである。

(3) 「佛性」は、“pwt'n'k kwtt r”を還元したものである。このソグド語の意味は、「佛の一族」の意味であり、マッケンジーは、ソグド語譯『維摩經』で“pwt'n'k t rmy”と譯されている「佛種」と同じだと述べている。これに對し、吉田豊氏は、“kw t(t)r”は「性」の譯語であり、“pwt'n'k kwtt r”も「佛性」と還元されるべきであると主張されたが(吉田1)、この説は、全く妥當なものである。ただし、吉田氏が、「しかし筆者は、このkw t r が『家族、一族』を意味する kw t r と同一の語と認めることには躊躇する」と述べ、この“kw t(t)r”をサンスクリット語の“gotra-”からの借用語とは別の経路でソグド語に入ったのではないかと考えていることについては、異議がある。確かに、「性」というのは、「家族」という意味と懸け離れており、これが同一の言葉で譯されていることについては、奇異な感じを抱かせるのであるが、次のように考えれば、全く問題はない。即ち、先づ、“pwt'n'k kwtt r”は、「佛性」ではなく、直接的には「佛姓」という漢語の譯と見るべきである。「姓」を“kwtt r”と譯すのは、全く正しい翻譯だからである。そして、この「佛姓」は、「佛性」の誤寫と考えることができる。「性」を「姓」と書く例は敦煌寫本には極めてしばしば見られることだからである。従って、このような譯語が用いられたのは、漢文が正しく書寫されておらず、その上、ソグド語への翻譯者が、そのことに氣付かなかつたという、二つが重なつたためと見るのであり得るのである。従って、吉田氏の言われるように、その由來する語源によって、“kwtt r”という同一の言葉に二種類があると想定する必要はないと思われる。いづれにせよ、ここで問題にされているのが、禪宗において、とりわけ重視される「佛性を見る」ということであるのは間違いない。「見佛性」については、『佛性海藏經』に、「若見佛性。則無煩惱。生死永盡。即名出世人也」(一三九八上)などというのを参照せよ。なお、ソグド語譯の譯者が、このような、禪の中核をなす思想を理解していな

かったということは、驚くべきことであり（もっとも、「性」を「姓」と筆寫した中國人も同様なのであるが）、ソグド人が、この經典や中國禪をいかに受用したのかということを考える上で、重要な示唆を與えるものと言えよう。

(4) この表現については、次の諸文を参照した。「佛性不現。名爲衆生」（『佛性海藏經』、一三九七下）、「未得悟空。佛性未顯」（同上、一三九九下）、「佛性既不顯現。煩惱云何能遣」（『心王經註』、一四〇三中）。

(5) この句は、ソグド語の "yw'r ZY 'ws'rt y p'zn rwt" の還元である。「yw'r」は、一般に、「除」という動詞に對應するが、ソグド語譯『觀佛三昧海經』の三七〇行目では、「但」という副詞の譯語として用いられている。ここでも、それに倣った。なお、「'ws'wrt y」というソグド語は、「清淨」（'ws'wrt y 't z p'rt）の「清」の字の譯語として廣く用いられているが、ここでは、文脈よりして、「淨」の譯語と考えた。すぐ下の「淨力」「淨慧」についても同様である。

【一五】

然若洗淨種子。／離殺害之。雖得時雨。／不得生長。凡夫之相。／亦復如是。若遇普知識。或諸佛。或菩薩。示以方便。以法杖／而。打分別心。心蟲即死。／内外清淨。其毒不長。／努力努力。調伏其心。所作微／妙。相應聖道。離於垢穢。／破無明殼。雖爲生死／愛水所潤。識芽不／長。心得清淨。生法王／家。入菩薩位。不棄／四弘願。以大善方便。得度／衆生。（29-43）

(1) "zp'rt sn'y'" は、恐らく、「洗淨」という漢語の直譯であろう。

(2) 「種子」は、「t r m c y k "δ'w k h" の還元である。以下、植物の喩えがしばしば用いられ、相互に關聯しつつ、異なる表現がいくつか見られる。その表現に相違が見られるのは、原語自體が異なっていたためと思われる。今回の還元では、次のように譯し分けた。

- 「種子」…… t r m c y k "δ'w k h (29).
- 「根」…… w y x 't β y z 'k (75), w y x β y z 'k (78, 267),
w y r h t' β y z 'k (55, 259).
- 「種」…… β y z 'k (97, 153).
- 「芽」…… t r m y Z K p 'n 'w δ 'k (39), p 'n 'w δ 'k (164).

なお、「p'n'wδ'k」が「芽」を意味することについては、吉田豊氏に御教示賜った。しかし、この語については、「萌」の譯語である可能性もあろう。

(3) "p r z r 'm L'" は、ソグド語譯の佛典では、「不得」「不復」「終不」の

譯語として用いられている。ここでは、『觀世音菩薩祕密藏如意輪陀羅尼神呪經』
(三〇行目)、及び、『維摩經』(三〇行目)に倣って、「不得」と還元した。

- (4) “n g t'yt” というソグド語が、「示」の譯語であることは、【二一】の註7を参照。

- (5) 「法杖」は、“δrm'yk δstβ'ry”の還元である。これについては、吉田豊氏から御教示を頂いた。

- (6) ソグド語は、“ptpt'y n"wy p'zn”。この“ptpt'y n"wy”という言葉が、「分別」という漢語に相當することは、この言葉が再び現れる、一三〇行目の文脈からみて疑う餘地がない(【二四】の註17参照)。

- (7) ソグド語は、“cntr βyk 'ws'wrtk 'PZY zp'rt βwt”である。この「内外清淨」という言葉は、次に掲げるように、初期の禪宗文獻に非常にしばしば現れるので、この還元が正しいことは、略ぼ間違いない。「心如虚空。内外清淨」(『法王經』、一三八七下)、「煩惱賊不起。内外清淨。方始名曰比丘尼」(金剛藏菩薩『觀世音經讀』)、「内外清淨。十八空法。開門大施」(同『金剛般若經註』)、「若如是知。即是内外清淨。而作佛事也」(『大日經義釋』、六一〇頁)。

- (8) ソグド語、“prtr 'nt'wrtst”を、「努力努力」に還元した。これと類似した表現は、『觀佛三昧海經』のソグド語譯、一二八行目に、“prtr s'ct 'ntwrs'k”と見え、「精進」の譯語として用いられている。しかし、ここでは、禪文獻によく現れる「努力」を採用した。この言葉は、例えば、『楞伽師資記』に、「不得懈怠。努力努力」(二四九頁)と見えるように、繰り返されることが多いので、ここでも、それに従った。

- (9) ソグド語は、“prw p'zn g yr 'βs'rsty”である。この「調伏其心」という句についても、『維摩經』に「以智慧調伏其心」(大正藏一四、五四九上)、また、『佛性海藏經』に「常以軟善。調伏其心」(一三九九下)、『大日經義釋』に「以諸餘善品。調伏其心」(三六四頁)などとしてしばしば見ることが出来る。従って、“βs'rsty”の原語が「調伏」であったことは、略ぼ確實である。なお、『心王經』には、これと類似した言葉がしばしば見え、しかも、それぞれが、異なる漢語に對應すると考えられる。今回の還元に当たっても、それらを區別したが、それらをここで纏めておくと、次のようになる。

「調伏」…… βs'rsty (36), βs'cy (166), βs'rs'y (166).

「摧伏」…… βtr'y nct (217).

「摧」…… syδt (272).

「伏」…… βtr'y nct (173).

「防」…… pcrw'y'y (118).

「破」…… 'n r w' y t (38, 125, 126, 138, 173, 271).
 「壞」…… "r' y n t (127).

- (10) 「微妙」は、ソグド語、"p y' s t y ' t p' r' r z β w t" の還元である。「p y' s t y」は「飾られた」、「p' r' r z」は「素晴らしい」を意味する。これと同様の表現は、二二三行目に、「p y' s t k ZY p' r' r z」と再び現れる。従って、これが、漢語のある熟語に対応することは明白である。そして、二二二行目では、これが、「r w y z' k w n y x ' r w」（非常に深い）に續いて現れている。ここで思い浮かぶのは、『法華經』の「方便品」の有名な句、「甚深微妙法」（大正藏九、六上）であろう。『心王經』には、外にも『法華經』の強い影響を認めることができるので、この句が、『法華經』の借用であることは、十分に考えられる。つまり、「r w y z' k w n y x ' r w」は「甚深」、「p y' s t k ZY p' r' r z」は「微妙」の譯語と見ることができるのである。従って、ここでも、「微妙」と還元されなくてはならない。
- (11) 「垢穢」は、「r y m」の還元である。この語については、次の文を参照せよ。「無慧水故。身則垢穢」（『佛性海藏經』、一三九七下）、「滌除垢穢心明潔」（『華嚴經』、大正藏一〇、二一〇上）。
- (12) "p w r r w s n y m r r y z' t k z w β' k h" は「無明穀」の譯語と見られる。この語は、『華嚴經探玄記』に、「令諸菩薩。依此修學。破無明穀」（大正藏三五、一〇八下）と見える。なお、マッケンジーは、その原語を「無明卵穀」とするが、この言葉は、中國の佛典には、ほとんど見ることができないものであるし、文字数の點から言っても不適當である。なお、「' n r w' y t」が「破」の譯語であることは、逸文の残っている一二五行目、一二六行目によって確認できる。
- (13) これと類似した表現はしばしば見える。「不以愛水灌漑業田。復不於中種識種子。如是比丘。名為法行」（『楞伽師資記』、一〇二頁）、「所謂業為田。識為種。無明闇覆。愛水為潤。我慢灌漑。見網增長。生名色芽。名色增長。生五根」（『華嚴經』、大正藏一〇、一九三下）などを参照。
- (14) この句については、『維摩經』の「我時心得清淨。歡未曾有」（大正藏一四、五四四上）を参考にした。また、『楞伽師資記』の「心即得明淨。心如明鏡」（二〇五頁）も参照せよ。
- (15) 『華嚴經探玄記』の「梁論二。生在佛家。如諸菩薩生法王家」（大正藏三五、三〇二下）を参照した。また、『華嚴經』の「佛子。菩薩住此焰慧地。則能以十種智。成熱法故。得彼內法。生如來家」（大正藏一〇、一八九下）、『大日經義釋』の「從此以後。常得生如來家」（二二五頁）も参照せよ。従って、「' s p' n c y h」は、「家」の譯語と見ることができる。これに對して、「宅」は、「r' n' k h」と譯されている（【二二】の註8を参照）。

(16) これは、ソグド語の “wyn pwtystβ pδβry' tyst” の還元である。この言葉については、『大智度論』の「是人遇佛聞是大乘法。發阿耨多羅三藐三菩提心。即時行六波羅蜜。入菩薩位。得阿鞞跋致地」(大正藏二五、三四二下)を参照せよ。

(17) ソグド語の “ctβ'r wkry RBk' "γδ'k” (四種の大願)は、明らかに「四弘誓願」の意味である。従って、マッケンジーが、『華嚴經』に説かれる、普賢菩薩の「十大願」と混同して、“but there are usually ten mahapranidhana of a bodhisattva (Edgerton, 360), not four”と述べているのは、的外れと言わねばならない。ただ、「四弘誓願」を意味することは間違いないにしても、『心王經』のここの表現では、「誓」に当たる單語がないので、恐らく、その省略形である「四弘願」の譯であろう。この用語は、『六祖壇經』に、「今發四弘願了」(禪の語録4、八六頁)と見ることができる。

(18) “k'w ǵyr wy" k pr'n'y t” は、漢文の「度」の翻譯と見られる。これについては、【一九】の註12を参照。しかし、ここでは、二字であるべきであるから「得度」と還元する。

【一六】

有照菩薩言。如何／名衆生。(43-44)

【一七】

答言。煩⁽¹⁾／惱⁽²⁾愛結。名爲衆生。然若能攝心。／寂然無相。不生不滅。／而起妙慧。得⁽³⁾度衆生。(44-47)

- (1) 「愛結」は、“pr'yw'k γr'nǵ” の還元である。この言葉については、『達摩禪師論』に、「故經云。心王煩惱愛結心。寂滅不生。故言寂」と見える(關口眞大『達摩大師の研究』、四六五頁)。なお、この『達摩禪師論』に引かれた經典は明らかでないが、文脈が本書とよく似ており、また、「道」という言葉が出ている点でも本書と共通するので、『心王經』を指す可能性もあるように思われる。なお、同様の言葉として、外に、二三四行目に、“δβnnh γr'nǵ”(「疑結」)、二八九行目に“sryβt'm γr'nǵ”(「惱結」)が見える。
- (2) 煩惱を衆生に見立てるということは、初期の禪宗、特に、普寂の影響下にあった北宗禪で、しばしば行われた。金剛藏菩薩撰という、『金剛般若經註』や『觀世音經讀』にも、「煩惱名衆生」という句が見える。

- (3) “ZKw p'zn 'nǵ'ypt” は、「攝心」と還元される。『維摩經』のソグド語譯では、「四攝」の「攝」を、この“'nǵ'yp”という言葉で譯しているし(マッケンジー、NOTES、一九頁)。「攝心」という言葉は、『楞伽師資記』に、「維摩經云。攝心是道場。此是攝心法。法華經云。從無數劫來。除睡常攝心。以此諸功德。能生諸禪定」(二四一頁)というように、初期禪宗で、しばしば用いられたものだからである。
- (4) 「無相」の「相」は、ソグド語譯の“ǵm'r'kh”に従えば、「想」とすべきであり、ソグド語譯の底本では、實際、「想」となっていたのであろう。しかし、『心王經註』の現存部分に、「煩惱不生。寂然無相。故曰頭陀」(一四〇二上)とあるので「無相」とした。なお、「想」と「相」は、書寫に際して、しばしば混亂が見られ、思想からいっても、初期禪宗で、これを區別していたとは思えない。
- (5) この「滅」は、ソグド語の、“wyδ'y t”の還元である。なお、ここで、本還元における、類義語の「漢語-ソグド語」對應を掲げれば、以下のごとくである。

「滅」…………… wyδ'y t (46,192), wyδ'y'y (204).
 「消滅」…………… wyt'wγst'y (157).
 「息」「休息」… 'nc'y't (218), 'nc'y't (162,269),
 'nc'y't (263), 'nc'y'y (147).
 「盡」…………… m'y'ms (289).

- (6) この句は、“p'r r z z n'kh 'w't nwkr myǵn”の還元である。マッケンジーは、“'w't”を“ǵw't”に換えて、“go”と譯している。しかるに、この“ǵw't”は、『心王經』でも、しばしば用いられており、いづれも「行う」という意味の漢語、「行」によく對應する。ところが、このみは、このまま當て填めれば、「行妙慧」という、極めて奇怪な表現になってしまう。このことは、マッケンジーの校訂が誤りであることを證するものと言えよう。

思うに、“'w't”は、“do, make”という意味の“wn't”の誤寫ではなかろうか。この語は、例えば、

“ZKw ǵyr 't ZKw rnt'kk m'n wnty”
 (「起善惡心」、一〇五行目)

“ǵyr'kk 't ZKw z'ry m'n wn”
 (「起慈悲心」、一三八行目。【二五】の註5を参照)

“ǵyr'k 't z'ry m'n wn” (「起慈悲心」、二三四行目)のように用いられている例があるので、「妙慧」に對しても使われる可能性が十分にあるからである。従って、ここでも、上の諸例に従い、「起」と還元しておく。

「妙慧」という言葉は、例えば、『大日經義釋』に、「以此妙慧。心無所著」(三四三頁)、「萬行以妙慧以導。不得離慧而有作也」(六五六頁)と見えている。

「妙慧」の「妙」を “p'r'az” と譯すのは、三七行目で、「微妙」の「妙」を “p'r'az” と譯しているのと對應する（【一五】の註10を参照）。

（7）「得度」については、【一五】の註18を参照。

【一八】

／有照菩薩言。⁽¹⁾觀煩惱相。⁽²⁾／內度衆生。可觀／其相。⁽³⁾然外法如何。（47-50）

（1）「觀」の原語は、“p'y”である。この語は、一二一行目や二一四行目では、「實相」を、また、一四九行目では、「心相」を目的語として現れている。この文脈から見て、「觀」という動詞の譯語と見てよいであろう。なお、【一三】の註7、【二四】の註6、註7を参照。

（2）この「度」は、“ayr”の還元である。この語は、『維摩經』のソグド語譯でも、實際に、「度」の譯語として用いられている（四行目）。なお、『心王經』の“k'w g'yr wy'k pr'n'y't”という表現も、「度」の譯語と見られるが（【一九】の註12参照）、こちらが意譯なのに對して、“ayr”は直譯なのであろう。なお、金剛藏菩薩撰『金剛般若經註』の「煩惱衆生。自性本離。有何所度」という文も参照せよ。

（3）この質問は、次のような意味に理解される。即ち、「《煩惱》や《愛結》という、心の中のを《衆生》と考へて、その《衆生》を度する（即ち、煩惱や愛結を超越する）ということとは理解できますが、自分の外に實在する、現實の衆生の濟度については、いったいどのように行ふべきなのでしょうかと。これは、自利のみでなく、利他も行ふべきだとの批判を豫想して、それに答えんとしたものと言えよう。

【一九】

心／王菩薩言。如是如是。⁽¹⁾如汝所說。／然內外不異。雖然不異。先／須觀內。一煩惱
／淨。所有法淨。⁽²⁾何以故。內心即是外。⁽³⁾身所有聖諦之根。⁽⁴⁾／若得此妙法。得度衆生。⁽⁵⁾
／衆生無量則。佛身亦無量。⁽⁶⁾／衆生無邊則。佛性亦無邊。⁽⁷⁾衆生／相即是空相。空相即
／是衆生相。以是之故。衆生是佛。⁽⁸⁾／若無衆生。即佛不生。是以／我說。諸佛菩薩。⁽⁹⁾
常／度衆生。然有所以善／方便說。衆生度佛。⁽¹⁰⁾／我常說。諸法平／等。無有二相。若
佛度／衆生。衆生與佛。即是平等。⁽¹¹⁾／（50-67）

（1）ソグド語譯では、“y'wz n'k 'aw”（「如是」）と一度だけであるが、『法王經』に、「佛告虛空藏菩薩言。善男子。如是如是。如汝所言。一切衆生。皆有

- 佛性」(一三八五下)とあるように、漢文佛典では、通常、二度繰り返されるので、ここでも、「如是如是」とした。
- (2)『法王經』に類似した表現が見られる。「一心淨則法法淨。一心垢則多法垢」(一三八七中)、「一心若善。諸法善盡。一心若惡。諸法惡盡」(一三八五下)。また、『觀世音經讀』に、「心淨則一切得淨」とあるのも参照せよ。
- (3)“c n t r Z K p ' z n”(内心)と“β y k p ' r c y k r r ' y w y”(外身)とを対照させるのは、『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』に、「應云。外身心」と見える(大正藏三六、二三〇下)。
- (4)「諦」は、ソグド語、“m' ḡ k h”の還元である。『心王經』には、外に、“m t y c m' ḡ k y h”(九四行目)や、“m t y c m' ḡ k h”(九五行目)という表現が見え、これは、「實諦」と還元さるべきものであるから、この“' r ḡ y w n ' y t y m' ḡ k h”(「聖諦」)と併せて、“m' ḡ k h”が「諦」の譯語であることは、間違いない。なお、“m t y c m' ḡ k y h”や、“m t y c m' ḡ k h”は、「眞諦」の譯語とも考え得るが、『法王經』に、「佛言。菩薩若欲懺悔。當觀實諦。若見實諦。諸罪悉除」(一三八七上)というのに従って、「實諦」に還元した。
- (5)マッケンジーに従って、“w y r h t' β y z ' k”を「根」と還元する。
- (6)「得度」については、【一五】の註18を参照。
- (7)この「無量」という言葉は、“p w ' y ' m”の還元であり、下の「無邊」は、“p w k y r ' n”の還元である。両者は、相互に類似した言葉であるが、恐らく、「無量無邊」という熟語を二つに分解し、前後に配したものであろう。「無量無邊」という言葉については、例えば、『六祖壇經』に、「當知此功德無量無邊。經中分明讀歎。不能具說」(禪の語錄4、一〇七頁)、『法華經』に、「當知是人行替賢行。於無量無邊諸佛所。深種善行」(大正藏九、六一下)と見える。
- (8)これについては、『佛性海藏經』に、「衆生無邊。佛亦應之。亦復無邊」(一三九七下)というのを参照せよ。
- (9)ここでは、“w' t δ' r y Z K p t k' r' k h”“w' t δ' r p r r n h”という二つのソグド語をとともに「衆生相」に還元した。しかし、もし、原語がともに「衆生相」であれば、どうして二通りにソグド語譯したのか不明である。なお、「衆生相」「空相」という言葉については、次に掲げるように、『文殊說般若經』に見え、それに基づくものと思われる。「法界之相。即是菩提。何以故。是法界中。無衆生相。一切法空故」(大正藏八、七二六中)、「何以故。衆生定相。不可得故。……若諸衆生。悉空相者。亦無菩薩。求阿耨多羅三藐三菩提」(同上、七二六下)。
- (10)この「以是之故」は、“c y w ' y δ p y δ' r”の還元である。この表現は、『佛性海藏經』に見ることができる(一三九二下、一三九五中など)。

- (11) この句については、『法王經』に、「佛是衆生。衆生是佛」(一三八五上)と見えるほか、しばしば禪宗文獻に現れている。例えば、「善知識。不悟即。佛是衆生。一念悟時。衆生是佛」(『六祖壇經』、禪の語録4、一〇八頁)、「自性若悟。衆生是佛。自性若迷。佛是衆生」(同上、一九〇頁)、「衆生是佛。佛是衆生」(『師資七祖方便五門』、『鈴木大拙全集』第二卷、四五三頁)などを参照。
- (12) 『少室六門』に、「若逆時。佛度衆生。若悟時。衆生度佛。何以故。佛不自成。皆由衆生度故」(大正藏四八、三七二中)と類似した表現がある。これに基づいて、ソグド語の“k'w ǰyr wy" k pr'n'y t" (善きところに導く)という、極めて原語を比定しにくい表現を「度」という一語に還元することにする。
- (13) この二句と類似した表現が、『勝思惟梵天所問經』に見える。「是人名得諸法平等。……無有二心。離於諸見。得無二法」(大正藏一五、九一中)。
- (14) 『楞伽師資記』の「佛與衆生。本來平等一際」(一〇二頁)を参照。

【二〇】

佛告心王菩薩。善哉善哉。／汝決定得入究竟陀羅尼慧。所言／是大。於菩薩大衆中。作師子吼。／示⁽³⁾平等法。我未曾⁽⁴⁾／說於他菩薩。唯除今於頭陀大／乘平等經。而心王菩薩。／慧得明淨⁽⁶⁾。饒益衆生。以大／慈悲。即是利根大士。／堪聞大法。菩薩方便／所說法者。則甚深而⁽¹⁰⁾。難信難／解。二乘凡夫。鈍／根小智。雖聞妙法。／無巧方便。故不能信。⁽¹³⁾ (68-80)

- (1) ソグド語は、“wy prβtm t'rny ʒn'kh pw ptw'rt t r t'y ǰ” (間違いなく究竟陀羅尼慧に入る)である。「究竟陀羅尼慧」という言葉は不自然であり、他に用例を知らない。通常、「慧」や「智」に対する動詞は、「得」であって「入」ではない。また、「陀羅尼」に対する動詞も同様である。例えば、『法華經』の「有婆竭羅龍王女。年始八歳。智慧利根。善知衆生諸根行業。得陀羅尼。諸佛甚深祕藏。悉能受持」(大正藏九、三五中)、『華嚴經』の「又更問法。得陀羅尼」(大正藏一〇、一九二中)を参照せよ。従って、ここには、何か文章に混亂があるように思われる。なお、ソグド語、“prβtm”が、「究竟」の譯語として用いられることについては、吉田豊氏の「ソグド語の『究竟大悲經』について」(吉田1)を参照せよ。

- (2) 似た言い回しが『佛性海藏經』に見える。「佛言。善哉善哉。汝今所言正。是大士」(一三九三下)。

- (3) ソグド語は、“ZKw mrry 't ZKw mr'wn pδkh 'nǰt'y'y 's kwn”である。“nǰt'y'y 's kwn”は、既述のご

- とく、「示」の譯語であり（【一五】の註4参照）、また、“ZKw mrry 't ZKw m'wn pδkh”、即ち、「平等法」については、『華嚴經』に例がある。「得決定辯才無盡藏。演說一切佛平等法。令諸衆生悉解了故」（大正藏一〇、一三四下）。
- (4) 「未曾說汝等當得成佛道」（『法華經』、大正藏九、八上）という表現を参照した。
- (5) ソグド語は、“yw'r”である。この「唯除」という表現は、『楞伽師資記』に、「唯除疑惑不能生信。此人不能悟入」と見える（二四九頁）。
- (6) ソグド語は、“ZK zn'kh rrwšny 't zp'rt”である。
“rrwšny 't zp'rt”と同じ表現は、一六九行目にも現れる。そこでは、“ZKw p'zn δ'yn'k”（「心鏡」）の形容として用いられている（【二七】の註5を参照）。『楞伽師資記』の、「心得明淨。信曰。……亦不令去。亦不令住。獨一清淨究竟處。心自明淨。或可諦看。心即得明淨。心如明鏡。或可一年。心更明淨。或可三五年。心更明淨」（二〇五頁）という文を参照するとき、この“rrwšny 't zp'rt”という表現が、漢語の「明淨」の直譯であることは、疑いようがない。
- (7) 『維摩經』に、「饒益衆生。而不望報」（大正藏一四、五五三中）と見える。
- (8) ソグド語は、“prw wyx 't byz'k wyc'wrtk mz'yx mrt rmy 'rw”である。マッケンジーは、“prw wyx 't byz'k wyc'wrtk”を文字通り、“knowledgeable about the root and the seed”と譯す。しかし、この翻譯は、意味が通じないうえに、マッケンジー自身の“that wyx and byz'k together can stand for 根 as indriya”（五五行目に對する NOTES）という説にも合わない。思うに、これは、文脈から見て、「利根」の譯と見るべきであろう。従って、七八行目に、“prw wyx byz'k sk'rn'k βwt”と、これと全く逆の表現が見えるが、これは「鈍根」の譯と見るべきである。また、“mz'yx mrt rmy”は、漢語に直譯すると「大人」となるが、『大般若經』に「善現。如是法門。利根菩薩摩訶薩能入」（大正藏六、八四八中）などというのよれば、「菩薩摩訶薩」のことと解すべきであり、「摩訶薩」の意譯として、しばしば用いられる「大士」の翻譯であったと推測される。
- (9) 『大日經義釋』に、「知己堅牢深淨。堪持大法」（三七九頁）とあるのを参照した。
- (10) ソグド語の“rwyz'kw nyx 'rw”が「甚深」の譯語であることについては、【一五】の註10を参照。
- (11) ソグド語は、“šk'wrδ cnn rrβ' šk'wrδ cnn pyr”

で、そのまま漢語に直せば、「難解難信」となる。しかし、『法華經』に、「而於其中。此法華經。最爲難信難解」（大正藏九、三一中）、『大日經義釋』に、「次加上所云。一相一味。眞實之見。難信難解」（五六五頁）というように、通常、逆に「難信難解」というので、今も、それに従って改めた。

- (12) ソグド語譯では、「二乗の凡夫」(ZK δw' prβ'ry myδ'kk mrtγm'k) となっているが、元來は、「二乗と凡夫」の意味であったと考えられる。初期の禪宗では、凡夫、二乗、菩薩は、嚴密に區別され、その間の相違が、しばしば問題とされたからである。しかし、いづれにせよ、その原語が、「二乗凡夫」であったことは間違いない。
- (13) 以上の四句については、次のように、『法華經』に類似した表現があるので、それを参照した。「舍利弗當知。鈍根小智人。著相憍慢者。不能信是法」（大正藏九、一〇上）。“zn'kh”は、『心王經』では、多く、「慧」の翻譯と見られるが、ここでは、この『法華經』の文に従って、「智」に還元した。なお、「鈍根」については、本節の註8を参照せよ。

【二一】

／善男子。我滅度⁽¹⁾後。多有衆生。／放逸而心行愛欲。俱犯於四／重五逆⁽²⁾。／成一闍提。無所依止⁽³⁾。思惟心王菩薩。／學頭陀法。心王菩薩。／有大方便慧慈／悲心。於衆生⁽⁴⁾。怨親不二⁽⁵⁾。／能敬信者⁽⁶⁾。直開方便⁽⁷⁾。／示眞實相。說法勝妙⁽⁸⁾。／聞之易解⁽⁹⁾。／無有異念。汝等應當正／心聽受⁽⁹⁾。(80-92)

- (1) 「若滅度後。千五百歲。五濁衆生。多作惡業。專行十惡」（『法王經』、一三八四下）、「汝於我滅度後。在於大衆中。能施人眼。廣濟群盲」（『佛性海藏經』、一三九二下）などを参照して還元した。
- (2) 『像法決疑經』の「若有俱犯四重五逆。易求可憍悔」（大正藏八五、一三三七下）という表現を参照した。
- (3) マッケンジーは、“r'γs'k wy'k'”を、「歸依處」に当たると言うが、『佛性海藏經』の「世尊。爲我徒衆。且住於世。莫般涅槃。我今在後。無所依止」（一四〇一上）を参照して、「所依止」と還元した。
- (4) 「有大方便慧慈悲心。於衆生」は、“mz'yx prγ'npy zn'kh 'sty 'PZY k'w w'tδ'r "zwnt s'r ǵyr'k 't ZK z'ry m'n”の還元であるが、なお、疑問が残る。
- (5) この句のソグド語は、“ZKw s'n ZY 'mw mnw L' prw δw' wkry tk'wǵt”である。この後半部分は、先に「不二」に還

元した表現、“prw δw' wkry L' ḡm'r't”（一〇六行目、【一〇】の註2を参照）と非常によく似ている。従って、ここでも、「不二」と還元した。なお、ソグド語の“mnw”について、マッケンジーは不明とするが、文脈から見て、“s'n”の対立概念であることは明らかであり、“s'n”が“enemy”の意味であるというのであるから、“mnw”は、「仲間」の意味でなくてはならない。では、その原語は何かと言えば、『楞伽師資記』に、「若初學坐禪時。於一靜處。直觀身心。四大五陰。眼耳鼻舌身意。及食嗅癢。若善若惡。若怨若親。若凡若聖。及至一切諸法。應當觀察。從本以來空寂。不生不滅。平等無二。從本以來。無所有。究竟寂滅。從本以來。清淨解脫」（二四九頁）という文が見えるので、“s'n”と“mnw”が、それぞれ、「怨」と「親」であったことは、略ぼ間違いない。そこで、この句は、「怨親不二」と還元されるわけであるが、實際、この句は、『大日經義釋』に、「此平等者。即是怨親不二」と見ることができるのである。なお、『華嚴經』に、「妻子集會。當願衆生。怨親平等。永離貪著」とあるように、佛典では、「怨親不二」という表現より「怨親平等」という表現の方が多く見られるようである。

- (6) ソグド語の“ky' ZK pyr 't ZK wrny p'zn βwt”は、恐らく、『法華經』の「方便品」（大正藏九、六下）などに見える、「能教信者」という表現の翻譯であろう。こう考えると、次の句が『法華經』に基づいているのとも、よく呼應する。従って、ソグド語の“pyr”と“wrny”の原語は、それぞれ、「信」と「教」であったと考えられ、ソグド語は、原文の單語の順序を入れ替えていることが窺われる（“pyr”が「信」に對應することは、七七～七八行目の「難信」の「信」の譯語として用いられていることから疑いえない）。
- (7) これは、明らかに、『法華經』の「此經開方便門。示眞實相」（大正藏九、三一下）という有名な言葉を承けたものである。従って、ソグド語の“rwyck' wnty”が「開」、「nḡt'y t」が「示」の譯語であることは疑いえない。この『法華經』の句については、『大乘無生方便門』に、「開方便門。示眞實相。六根不動等是開方便門。定慧是眞實相」（『鈴木大拙全集』第三卷、一八〇頁）と見えるほか、北宗禪系統の著作には、ほとんど全てに見られ、この系統の禪において、極めて重視された一句であったことが窺われる。
- (8) “ny'z'nk ḡm'r'kh”を「異念」に還元した。この言葉はよく見られるもので、例えば、『心王經註』に、「心王自在。能使識不起異念」と見える（一四〇二中）。なお、二三八行目にも、“ny' ḡm'r'kh”と、類似した表現が見えるが、これも、同じく「異念」の翻譯であろう。
- (9) ソグド語の“nr'wḡ'y δ 'PZY p t r r β'y ḡ δ”は、恐らく、漢語の「聽受」をそのまま直譯したものであろう。この「聽受」という言葉は、『法華

『經』の「方便品」に、「欲聽受佛語」（大正藏九、七上）と見える。また、“pr wyzrw p'zn”は、例えば、『金光明經文句』に、「今示正念聽經。正念聽經。能致無量功德」（大正藏三九、七五上）と見えることなどを考えれば、あるいは、「正念」と還元すべきであるかもしれないが、本經においては、一般に、「念」（ǵm'r'kh）と「心」（p'zn）は、嚴密に譯し分けられているようであり、實際、他に、“prw wyzrw ǵm'r'kh”（一二〇行目、一四五行目）という表現が見え、これは、正しく「正念」に當たるので、ここでは、これと區別して、文字通り、「正心」に還元した。

【二二】

諸法實⁽¹⁾／相。即是衆生相。心中取⁽²⁾／捨。即遠離實諦⁽³⁾。所以者何。／實諦即是道。道名無爲。／無爲⁽⁴⁾是一。一智⁽⁵⁾／能斷一切諸見。見種不長。／名爲解脫。解脫亦空。／體空清淨。無有遺餘⁽⁶⁾。名爲般若。／般若⁽⁷⁾是智。智是／心光。照陰界入。暗宅⁽⁸⁾／開明⁽⁹⁾。其明／無量。無量心光。名涅槃慧。／其慧能知。四大勝城⁽¹⁰⁾。／五陰淨宅⁽¹¹⁾。然若起善惡心。／即是提婆。色心不二。／即是佛陀。與八萬四千衆。安於清／淨。能持一切菩薩之淨戒。（92-108）

（1）類似した表現が北宗文獻に見える。「了衆生相。即是實相。故言。本性清淨」（『心王經註』、一四〇二下）、「一切衆生相。即諸法實相。若取衆生相。即遠於實相」（『金剛般若經註』）などを参照せよ。従って、ここでは、“wyspy”は「諸」、「mtyc”は「實」の譯語と見ることができる。

（2）“s'”は「取」、「pspy'”は「捨」の譯語と見られる。このことは、『法王經』に、「若無取捨。即無所得。若無所得。即名菩提。何以故。衆多煩惱。皆一心生。心若不生。煩惱不生。於諸境智。即無取捨。若無取捨。即離諸著」（一三八四下）という文があり、この部分のソグド誤譯で、「取」を“s'」、「捨」を“pspy'y”と譯していることから疑いえない（吉田2参照）。

（3）「實諦」（mtyc m'ǵkyh）については、【一九】の註4を参照。ソグド語の“δwr pw'rtt”が漢語の「遠離」の直譯であることは、文脈より見て、略ぼ間違いない。「遠離」という言葉については、『傳法實紀』の「則脩多羅所謂宗通者。謂緣自得勝進。遠離言說文字妄想。趣無漏界自覺地。自相遠離一切虛妄覺相。降伏一切外道衆魔。緣自覺趣光明輝發。是名宗通相」（三三七頁）を参照せよ。

（4）この部分と極めて似た表現が、金剛藏菩薩の『金剛般若經註』に見える。「悟心之人。知一切衆生皆是无爲。無爲即道。道即是佛」（スタイン二五一一號）。これ

は、兩者の親縁性を示すものである。なお、「無爲是一」で「是」と還元したのは、“p t ̥ s m y r t y”で、文字通りの意味は、「数えられる」ということであり、一九行目で「計」に、また、二〇行目で「議」に還元したものと同一の単語である。ここでは、原語は「是」であったが、意味を明確にするために、このように翻譯したものと見た。

- (5) 「一智」は、ソグド語では、“ZK 'y w p k r y w y c' w r t k z n' k h”、即ち、「一種智慧」となっている。原語は、あるいは、「唯一智慧」であったかも知れない。
- (6) “w' r' k CWRH”を、一應、「體空」と還元したが、「性空」の譯語である可能性もあろう。
- (7) “'p w r ɣ m' k”を「無有遺餘」と還元するについては、『法王經』の、「譬如千年座鏡。以衣一拂。其鏡即明。諸塵皆盡。無有遺餘」(一三八七中)、『大日經義釋』の、「若脩此字門。亦能淨除。無有遺餘」(四三〇頁)を参照した。
- (8) 『六祖壇經』に、「煩惱暗宅中。常須生慧日」(禪の語録4、一三六頁)とあるので、“t' r c h ɣ' n' k h”の原語は、「暗宅」であったと推定される。従って、『心王經』では、“ɣ' n' k h”は、「宅」の譯語と見ることができる(ただし、同じソグド語譯佛典である『維摩經』では「舍」、『觀佛三昧海經』では「室」の譯語として用いられている)。なお、【一五】の註15も参照せよ。
- (9) ソグド語は、“'m w r ɣ w ̥ s n y' k h ɣ w y c k' w n t y”、即ち、「明を開く」となっている。“ɣ w y c k' w n t y”が「開」に對應することについては、【二一】の註7を参照せよ。この言葉は、明らかに、「開明」という漢語の形容詞を、動詞とその目的語と解した上で、それを直譯したものである。この言葉は、例えば、『大日經義釋』に、「心轉開明。自然悟解十緣生句」(四〇八頁)、『金剛般若經註』に、「諦之言實。覽之言印。以印印心。心地開明。菩提文現也」、「心淨無異。慧眼開明。見種種色」と見える。
- (10) ソグド語は、“ZK 'z n' k h 'm y n c t β' r m z' y x w k r y k n δ y h ɣ w p w y c' w r t' w' k w n t y 't p n c w k r y p t r' w δ z p' r t ɣ' n' k h” (その慧は、四大之城と五陰の淨宅をよく理解する)であり、文字通り還元すれば、「其慧勝知四大城。五陰淨宅」のようになる。しかし、この場合、「四大」と「五陰」は對句であったはずで、四大の「淨宅」に對して、五陰は「勝城」となるべきであろうと思われる。今は、漢文原寫本の寫誤と見て、上のように還元した。なお、五陰を家に喩える例は、ほかにも見ることができる。「以無生慧力。割截五陰舍宅」(『金剛般若經註』)、「五陰舍宅。觀悉空寂」(『金光明經文句』、大正藏三九、六一上)などを参照。
- (11) ソグド語の“w y r m t y”は、『心王經』にのみ現れる言葉で、外に、一四五

行目、一六八行目、二一五行目にも見ることができる。このうち、一六八行目と二一五行目については、その文脈から、原語は「安」であったと推測できるので（【二七】の註4、及び、【二九】の註12を参照）、ここでも、「安」に還元した。

【二三】

／爾時。有照菩薩。即從座起。⁽¹⁾而頂禮佛。／爲諸衆生。同二箇事。若／菩薩修行頭陀。持何等戒。／又如何持之。如何犯／之。（108-113）

（1）『法王經』の「即從座起。繞佛三匝」（一三八四下、一三八九中）という表現を参照した。

【二四】

佛告有照菩薩。汝／大慈大悲。⁽¹⁾入他心三昧。⁽²⁾／爲後代暗心衆生。作如是問。⁽³⁾／諦聽。我當爲汝說。若／脩行頭陀者。先當作方便。⁽⁴⁾／防内外賊。背邪／歸正。⁽⁵⁾七日七夜。守身心淨。／宴坐正念。觀身／實相。受佛心戒。／是名爲法解脫。戒有二／種。一者内戒。⁽⁶⁾二者外戒。⁽⁷⁾覺／觀心動。是犯内戒。⁽⁸⁾／破内頭陀。覺身有相。／是犯外戒。⁽⁹⁾破外頭陀。⁽¹⁰⁾若犯内／戒。是壞法身。若犯外／戒。是犯色身。若内／外俱犯。非我弟子。我非本師。⁽¹¹⁾雖／具足多聞。分別宣說十二部經。／二時頭陀。不能守護佛法僧／城。心外馳散。⁽¹²⁾／不斷恥辱。則是重罪。名／一闍提。（113-134）

（1）ソグド語の“mz'yx šyr'k 't RBk' z'ry m'n”は、文字通り、「大慈大悲」に還元されるべきである（ただし、“m'n”はソグド語で補われたものであろう）。『大日經義釋』の「若作息災。即用大慈大悲」（六三九頁）という文を参照せよ。

（2）「他心三昧」（'nyw p'zn s'm'ry）は、あまり見かけない言葉である。いわゆる「他心通」を意味することは、文脈から明らかであるが、今は、言葉通り還元しておいた。

（3）この二句の“wsn pyštrw'yck t'r'k p'zn w'tδ'r m'n'kh wp'rs ps'y”という表現の還元にあたっては、『佛性海藏經』の「汝是大士。愍念後代衆生。作如是問」（一三九三上）という表現を参照した。マッケンジーは、“pyštrw'yck t'r'k p'zn w'tδ'r”を、『觀佛三昧海經』（一八三行目）に見える、「來世盲冥衆生」という言葉の翻譯であり、ソグド語譯『觀佛三昧海經』の方が、その原文に忠實だと述べる。更に、『心王經』の一八一行目に見える“kwr 'PZYn t'r'k”も、「盲冥」の

翻譯だという。マッケンジーのこのような意見は、「來世盲冥衆生」と類似した表現が漢譯佛典や、中國撰述の佛典に數多く存在することに氣付かないばかりか、『心王經』のソグド語譯が、いかに原典に忠實になされているかということを知らないものである。この部分に限っていえば、『心王經』では、“t'r'k”は、常に、「暗」に、“p'zn”は、常に、「心」に對應しているの、文字通りに、“t'r'k p'zn”は「暗心」と還元されるべきである。

- (4) この表現については、『佛性海藏經』の「汝非不解。慈悲一切衆生故。能如是同。汝當諦聽。我當爲汝說正法要」(一三九四中)や、『諸經要抄』の「楞伽經云。…佛言。諦聽。當爲汝說」(大正藏八五、一一九五下)という文などが参考となる。従って、「諦聽」という漢文佛典の決まり文句が、“n't n'r'wš”と譯されていることが知られる。『觀佛三昧海經』のソグド語譯に、「諦觀」の「諦」の字を“n'tt wc'rt”と譯している箇所がある(五三行目)のが参考となろう。

- (5) 『佛性海藏經』に、「背正歸邪。謂爲解脫」(一三九九下)と見えるのに倣った。

- (6) ソグド語譯では、“ywn kt'ky prw wyzrw šm'r'kh nyδ'y”(家で正念に坐す)となっている。“ywn kt'ky”(家で)は不自然な表現であるが、恐らく、「宴坐」の「宴」の翻譯であろう。「宴」の原義は、「屋内で安んじる」の意味であるからである。『維摩經』の「憶念我曾於林中宴坐樹下」(大正藏一四、五三九下)などの文を参照。なお、マッケンジーは、『觀佛三昧海經』のソグド語譯において、漢語の「正觀」が、この“wyzrw šm'r'kh”によって譯されていることを指摘しているが、『心王經』の用例を見ると、“šm'r'kh”は、常に、「念」、あるいは「想」の譯語として用いられていると認められる。しかも、『心王經』には、一五九行目に、“p'y”という名詞が見えるが、これと同系統の“p'y'y”が、「觀」という動詞の譯語であることは、次の註7に述べるように、略ぼ確實であるため、この“p'y”という語こそが「觀」という名詞の譯語と見るべきである。

- (7) これは、『維摩經』の有名な句、「如自觀身實相。觀佛亦然」(大正藏一四、五五四下～五五五上)を受けたものであろう。初期の禪宗で、この句が重んじられたことは、『金剛般若經註』に二度も引用されていることによっても窺われる。従って、“p'y'y”は、「觀」の譯語であると推測される。

- (8) 初期の禪宗では、戒を常に「心戒」として捉えている。『大乘無生方便門』の「菩薩戒是持心戒。以佛性爲戒性。心覺起即違佛性」(鈴木大拙全集)第三卷、一六八頁)や、『金剛般若經註』の「持心不起。即是如來常住於世。心戒清淨。生無量智」といった文を参照。

- (9) ソグド語譯では、“PZY ms tymn δw' wkry 'sty

cntr-p'r ǰkǰ'pt ZY βykp'r ǰkǰ'pt"となっており、これをそのまま漢文に直せば、「更有二種。内戒。外戒」となるが、『大日經義釋』に、「此中。供養有二種。一者外供養。二者内供養。下文當廣說」（三七頁）と類似した表現が見え、また、『諸經要抄』にも、「涅槃經云。戒有二種。一者性自能持。二者須他教敎」（大正藏八五、一一九五上）という例が見えるので、これらを参考にして、上のような文章に還元しておいた。

ところで、ここで併せ考えるべきは、ソグド語譯のこの直前の部分が、"rty nwkr δrm'yk rwyck" w'k ǰkǰ'pt rwynty"となっているということである。これは、「(是)名(爲)法解脫戒」と還元できるが、あるいは、この末尾の「戒」という文字は、次の文の冒頭につくべきものであり、次の文の主語となるべきものであったのではなからうか。もし、そうであるとすれば、ソグド語譯の譯者が、誤って文章を區切ったことになる。従って、この還元では、上の文の「法解脫戒」の「戒」の字は削った。

- (10) 以下の部分は、『導凡趣聖心決』に、次のように引用されている。「頭陀經云。覺觀心動。是犯内戒。覺身有相。是外戒。若犯内戒。是壞法身。若犯外戒。是犯色身。若内外具犯。非我弟子。我非本師」（ペリオ三六六四號）。なお、この部分の冒頭、「覺觀心動」を、ソグド語譯は、"rtykδ ZK ptβ'yδy 't ZK wyn p'zn wyc't"、即ち、「もしも、覺と觀の心が動くならば」と譯しているが、これは、明らかに誤譯と見るべきである。例えば、『楞伽師資記』に、「坐時當覺。識心初動。運運流注。隨其來去。皆令知之。以金剛慧徵責。猶如草木無所別知。知所無知。乃名一切智。此是菩薩一相法門」（一九九頁）とあるのを考え合わせれば、これは、元來は、「心が動くのを察知したら」の意味に取るべきものであるからである。
- (11) この「破内頭陀」は、"ZK cynt rp'r'yck δ'w-t' 'nrw'yt"の還元である。この句は、『導凡趣聖心決』の引文に缺いているが、ソグド語譯に際して付け加えられたとは考えにくいので、元來、あったものであろう。恐らく、『導凡趣聖心決』が、不注意のために脱落したか、あるいは故意に省略したかしたのであろう。
- (12) この「是犯外戒」の一句は、ソグド語譯にないが、『導凡趣聖心決』によって補った。但し、『導凡趣聖心決』では、「是外戒」と、「犯」の字がないが、これは明らかに脱落である。文脈から見て、當然あるべきこの一句が、ソグド語譯に缺いているのは、ソグド語譯の底本が既に脱落していたか、ソグド語譯本の轉寫の際に脱落したかのいずれかであろう。
- (13) この「破外頭陀」（ZKw βykp'r'yck δ'w-t' 'nrw'yt）は、上の「破内頭陀」と對句をなすものであるが、「破内頭陀」と同様、『導凡趣

聖心決』の引用文に缺いている。

- (14) この「犯」という字に当たる部分のソグド語譯は、“*ʾδ k'yn wnt y*” となっており、他の部分の「犯」が、“*ʾrw'wty*” や “*ʾr'wty*” であるのと異なっている。この「是犯色身」という句は、上の「是壞法身」と對句を成しているが、こちらも「犯」ではなくて「壞」という言葉を使っているのも、この場合も、「犯」という、この周囲にしばしば用いられている言葉を用いるのは、漢文の修辭上、不適當と思われる。従って、この「犯」という文字は、『導凡趣聖心決』に、このように引用されているにも拘らず、問題を残すものである。しかし、この “*ʾδ k'yn wnt y*” という言葉は、他に出現例が知られていないので、その原語を想定する手段がない。従って、今は、止むを得ず、假に、『導凡趣聖心決』の引用に従っておくことにする。
- (15) この「我非本師」の句についても、ソグド語譯にないが、上の「是犯外戒」と同じ理由から、『導凡趣聖心決』によって補った。
- (16) 『宗鏡錄』の「大涅槃經云。若見如來常不說法。是名具足多聞」（大正藏四八、五八〇下）という文を参照。なお、この『涅槃經』の句は、『修心要論』にも引かれており、初期の禪宗で重んじられたことが分かる（大正藏四八、三七八上く『最上乘論』）。また、『楞伽師資記』に、「則知如來常不說法。是乃爲具足多聞」（一九九頁）といい、『歷代法寶記』に、「常知如來不說法者。是名具足多聞」（禪の語錄3、二八六頁）、更に、『大日經義釋』に、「若知如來常不說法者。乃名具足多聞」（三二〇頁）というのも、この『涅槃經』の文を承けたものであろう。
- (17) “*ptpt'yn prβyrt*” を「分別宣說」と還元するに当たっては、『法王經』の「我當爲汝分別宣說眞實大乘決了義」（一三八四下）という文を参照した。
- (18) 『梵網經』の「若佛子常應二時頭陀。冬夏坐禪。結夏安居」（大正藏二四、一〇〇八上）を参照。
- (19) これに類似した表現は多い。「守護心城。摧伏外道」（『心王經』、【一】）、「守護心城。不令賊入」（同上、【七】）、「守護法城」（『維摩經』、大正藏一四、五五六下）、「令彼衆生。牢固心城。勿令賊入。六識大門」（『法王經』、一三八五上）などを参照。
- (20) “*gyg'tk βwt*” は、「馳散」の譯であろう。『楞伽師資記』の「其心欲馳散。急手還攝來。如繩繫鳥足。欲飛還掣取。終日看不已。泯然心自定」（二四一頁）という文を参照せよ。
- (21) “*nnk' 't prw'k'*” というソグド語が、マッケンジーの言うように、“*shame and calunny*” という意味であるなら、間違いなく、漢語の「恥辱」の譯語であろう。しかし、ソグド語譯が、「人を辱める」のように理解されるのについ

ては、疑問を禁じ得ない。通常、宗教に入る人間こそが恥辱を感じるものだからである。従って、この文の意味は、文脈よりするに、「心が外に馳散することこそが、恥辱であり、重罪である」という意味であろうと思われる。思うに、原漢文は、ここに還元したように、「不斷恥辱」であって、これは、訓讀すると、「不斷に恥辱さる」と受け身に讀まるべきものであったのを、譯者が、「人をはずかしめる」と誤譯したのではあるまいか（漢文では、往往にして、意味が明確である場合、「所」「爲」「被」などのはっきりした受け身表現は避けられる傾向が強い）。

【二五】

有⁽¹⁾照⁽²⁾菩⁽³⁾薩⁽⁴⁾白⁽⁵⁾佛⁽⁶⁾言⁽⁷⁾。／凡⁽⁸⁾夫⁽⁹⁾愚⁽¹⁰⁾癡⁽¹¹⁾。貪⁽¹²⁾求⁽¹³⁾名⁽¹⁴⁾利⁽¹⁵⁾。／不⁽¹⁶⁾行⁽¹⁷⁾聖⁽¹⁸⁾言⁽¹⁹⁾。亦⁽²⁰⁾不⁽²¹⁾親⁽²²⁾近⁽²³⁾善⁽²⁴⁾／知⁽²⁵⁾識⁽²⁶⁾故⁽²⁷⁾。破⁽²⁸⁾頭⁽²⁹⁾陀⁽³⁰⁾行⁽³¹⁾。／世⁽³²⁾尊⁽³³⁾。起⁽³⁴⁾慈⁽³⁵⁾悲⁽³⁶⁾心⁽³⁷⁾。／憐⁽³⁸⁾愍⁽³⁹⁾衆⁽⁴⁰⁾生⁽⁴¹⁾。示⁽⁴²⁾以⁽⁴³⁾眞⁽⁴⁴⁾道⁽⁴⁵⁾。／（134-139）

(1) ここで、「白……言」と還元した語は、“p t' y ǝ k w y”であって、『心王經』では、もう一箇所、二二八行目に現れる。『心王經』には、「告げる」「語る」という意味の語として、外に、“N Y ~ W”、“w' β”、“p r β' y r t”といった語が用いられており、それぞれ、對應する漢語に相違があったと考えられる。従って、ここで特に、この“p t' y ǝ k w y”という特殊な用語が用いられていることについては、そこに、何らかの特別な意味があったと考えられる。これら二つの『心王經』の文脈を見てみると、いずれも、菩薩が佛に對して告げる、即ち、目下のものが目上のものに語りかける形になっていることが知られる。恐らく、この語には、そのような意味合いが含まれているのであろう。従って、この「白……言」という漢語が、正しく相當することになる。なお、この語は、『觀世音菩薩祕密藏如意輪陀羅尼神呪經』のソグド語譯（六四行目）と『觀佛三昧海經』のソグド語譯（一八二行目）にも、一例づつ見えるが、いずれも、同様の文脈で用いられており、特に、前者においては、實際、「白……言」の譯語として用いられている。なお、【一一】の註2を併せて参照せよ。

(2) ソグド語の“c' w n z y h Z K w w r' k h p r w y δ t w”を「貪求名利」に還元した。この表現は、次に掲げるように、初期禪宗文獻に、しばしば見ることができるからである。「此人貪求名利。自壞壞他」（『楞伽師資記』、一一二頁）、「乃始蠢蠢隨俗貪求名利」（『修心要論』、大正藏四八、三七八下く『最上乘論』）。「貪求」という表現は『心王經註』にも、「貪求涅槃是凡夫」（一四〇二下）と見えている。

(3) 『勝思惟梵天所問經』に、「三者。親近善知識故」（大正藏一五、六五中）とあるのを参照した。

- (4) ここで「行」に還元したのは、“r't'wsp'y”であって、この語は、『心王經』では、通常、「脩」の譯語として用いられている。これについては、【二六】の註12を参照せよ。しかし、「頭陀脩」という言葉は奇妙であり、やはり、「頭陀行」でなくてはならないであろう。
- (5) ソグド語は、動詞を、“wn'”（する）としているが、『諸經要抄』に「起慈悲心。愍念有情」（大正藏八五、一一九三中）というのに従って、「起」とした。しかし、また、原語が、「生慈悲心」であった可能性もある。『佛性海藏經』の「於大衆中。生慈悲心」（一三九五中）を参照。また、【一七】の註6を参照せよ。
- (6) ソグド語の“z'ry sy'”は、『觀佛三昧海經』の一八三行目では「慈愍」、『觀世音菩薩祕密藏如意輪陀羅尼神呪經』の三四行目では、「憐愍」の譯語として用いられている。ここでは、後者に従った。
- (7) ここで「眞道」と還元したソグド語は、“wyzrw r'dh”であって、“wyzrw”は、通例、「正」の譯語であるが、ここでは、『二入四行論』に、「法師感其精誠。誨以眞道」（禪の語録1、二五頁）とあるのに従って、「眞道」としておいた。なお、この『二入四行論』の句は『楞伽師資記』にも引かれている（一二八頁）。

【二六】

佛告有照菩薩。善哉善哉。／善男子。汝能爲諸衆生。問如是事。⁽¹⁾／我爲汝說。三界虛妄。唯一心作。⁽²⁾若欲憐／悔者。五蓋樹／下。端坐正念。身心相應。以／慧力徵。即是化煩惱師。／息諍論行。／以正心。於諸菩薩四方衆前。觀於心相。／亦不在內。亦不在外。亦不在中／間。心相離則。罪／垢亦離。如是漸漸脩法。／法相慧水。從空而注。⁽¹⁴⁾／灑淨罪垢。戒種直／長。頭陀法戒。清淨／如□。⁽¹⁵⁾若如是憐／悔者。千劫萬劫。／雖有大罪。於一念頃。悉皆消滅。⁽¹⁸⁾／如是觀者。不見罪／在內外中間。於一切諸觀／中。最爲第一。無心無緣。前／後際斷。心心數法。／無有休息。學般若心。名爲正見。⁽²¹⁾／以大慈悲。識煩惱性。／菩提芽長。巧方便／現。⁽²⁵⁾（140-165）

- (1) 『法王經』に、「善哉善哉。善男子。汝能爲諸衆生。問如是事」（大正藏八五、一三八四下）とあるのに據った。
- (2) ソグド語の“cw prm dry βwmh zrmh 't n'm'yth 'sty rty wyspw cnn m'n 't p'zn wnty”を「三界虛妄。唯一心作」と還元するに当たっては、『修心要論』の「三界虛幻。唯是一心作」（大正藏四八、三七八中く『最上乘論』）、『大乘心行論』の「是故經云。三界虛妄。但一心作」（ペリオ三六六四號）、『華嚴經』の「三界所有。唯是一心」

(大正藏一〇、一九四上)などを参照した。

- (3) マッケンジーに従って、ソグド語の “'r ǰ n'm rwy z'y... 'nz 'n'k my n'y” を「懺悔」に還元する。『楞伽師資記』に、「替賢觀經云。一切業障海。皆從妄想生。若欲懺悔者。端坐念實相。是名第一懺」(一九二頁)、『法華經』に、「菩薩若欲懺悔。當觀實諦。若見實諦。諸罪悉除」(一三八七上)とあるのを参照せよ。
- (4) ソグド語の “wyr'mtk ny δ'y” (安らかに坐す)の原語は、必ずしも明らかでない。“wyr'mtk” は、『心王經』では、一般に「安」の譯語と見ることができるが(【二二】の註11参照)、『修心要論』の「若有初心學坐禪者。依觀無量壽經。端坐正念」(大正藏四八、三七八上く『最上乘論』)、
「端坐正念。善調氣息」(同上、三七九上)という表現に據って、「端坐」に還元することにする。
- (5) ここの部分は、ソグド語では、“'wyh pnc wkry 'r'wδ wn'kh c'δr wyr'mtk ny δ'y prw wyzrw ǰm'r'kh CWRH 'M m'n pr'yw zβ'yry”、即ち、「五蓋樹下に端坐し、正念もて身心相い應ず」となっており、「正念」を下の文にかかるものとしている。しかし、私は、この還元に當たって、ソグド語譯を漢文原典の誤讀と見、文章の句讀を変更した。
- (6) ソグド語の “pr'yw zβ'yry”の意味は、明らかでない。吉田豐氏の御教示によれば、「相談する」の意味であるというが、文脈よりするに、「身」と「心」の一致、あるいは合一を説くものであることは明らかであるので、今、假に、「身心相應」としておいた。
- (7) ソグド語の “r nβ'y”の意味を、マッケンジーは、“attack” かと推測しているが、恐らく、これは、漢語の「微」「慙」、あるいは「微責」の翻譯であろう。この「心を微する」觀法は、初期の禪宗文獻にしばしば現れており、實際に行われたことが窺われるからである。『楞伽師資記』の「坐時當覺。識心初動。運運流注。隨其來去。皆令知之。以金剛慧微責。猶如草木無所別知」(禪の語錄2、一九九頁)や、『修心要論』の「慙其心。不在内。不在外。不在中間」(大正藏四八、三七九上く『最上乘論』)、
「於行住坐臥中。恒慙意看心」(同上、三七八中)などの文を参照せよ。
- (8) ソグド語は “wy t rwy sry β t'my mwck'” で、直譯すれば、「煩惱師」となる。しかし、もし、この言葉をそのまま採用すれば、例えば、『宗鏡錄』に、「於六七識上。妄起端由。向根塵法中。強爲主宰。固異生之疆界。爲煩惱之導師。立生死之根原。作衆苦之基址。壞正法之寶藏。違成佛之妙宗。塞涅槃之要津。盲般若之智眼。障菩提之大道。斷解脫之正因。背覺合塵。無先於此」と、悪い

意味で、「煩惱之導師」という言葉を使っているように、ここでも、「煩惱を教えるもの」という意味となってしまうであろう。マッケンジーが、“become master of the passions which pervert his mind” と譯しているのは、正に、その意味であるが、このように解すと、ここでの文脈に合致しないように思われる。この文脈では、どう見ても、この “wy t r w y s r y β t ' m y m w c k '” は、好ましい意味と考えざるをえないからである。

マッケンジーの翻譯は、恐らく、ソグド語の “m' n p r w ' y r t ' y” を “pervert his mind” (彼の心を邪道に導く) の意味に解したのであろうが、“m' n p r w ' y r t ' y” は、『心王經』の一八〇行目にも、名詞として、そのままの形で出ており、また、ソグド語譯『維摩經』でも、しばしば見えるので、この二語で、一つの漢語の譯語として用いられていると見るべきである。では、その漢語とは何かと言え、ソグド語譯『維摩經』の一〇七行目では「教化」、一二二行目では「化」の譯語として用いられているので、それが、「化」という一語の譯語であったことは、略ぼ間違いない。そして、「化」は、常に「感化」の意味であって、決して、“pervert” の意味になることはない。従って、この点からしても、マッケンジーの譯は、少なくとも原漢文にはそぐわないものである。

ここで問題となるのは、この『心王經』の文脈において、この「化」という語が、どのように、上の「煩惱師」と関係するのか、ということである。思うに、この「化」は、「煩惱」を「化」という形で、「師」の形容となっていたのであろう。即ち、原漢文が、「化煩惱師」であったとすれば、肯定的な意味となって、この文脈とも合うし、煩惱を衆生と見做し、それから脱することを説く、【一六】から【一八】の論旨とも呼應することとなるのである。

(9) この二句は、“r t y c n n w z r w p ' z n k ' w p w t y s t β t ' P Z Y c t β ' r k y r ' n ' n t ' c p t ' y c y” の還元であるが、なお、疑問が残る。

(10) この表現については、『法王經』の「若化衆生。令其心住。住不在内。住不在外。住不中間。諸佛乘法。亦不在内。亦不在外。亦不在中間」(一三八五中)、『維摩經』の「心亦不在内。不在外。不在中間」(大正藏一四、五四一中)を参照した。

(11) 初期禪宗文獻では、「離」という動詞が、ほとんど「空」と同じ意味で用いられる場合がある。例えば、金剛藏菩薩の『金剛般若經註』に、「煩惱衆生。自性本離。有何所度」とか、「煩惱衆生。性本自離」などと見ることができる。この「離」の用法も、これに近いと言えよう。

(12) この句は、ソグド語の “' Y K ' p r ' y m ' y δ w k r y k β n w k β n w p r w ' r t ' w s p y p δ k h ' w 3 t” (このようにして、少

しづつ正しい法の中に立つ)の還元である。“’rt’wspy” (正しい)という単語は、『心王經』では、“’rt’wspy ḡw’(nt)” (一一一行目、一一七行目) “’rt’wspy ywrs.ty” (二七五行目)、“’rt’wspy r’ḡh” (二九五行目)のように用いられ、それぞれが、順に、「脩行」「脩學」「脩道」に對應すると考えられる。つまり、漢文の「脩」という動詞は、ソグド語譯では、ほとんど完全に“’rt’wspy”という形容詞に置き換えられていることが知られる。従って、この場合も、“’rt’wspy”の原語は、「脩」であったと考えられ、この形容詞が“pḡkh” (「法」)という名詞を修飾しているので、「修法」の譯であったと思われる。いづれにせよ、ここからは、脩行とともに境地が高まるといふ、漸悟的な發想を見て取ることができるであろう。

- (13) “zn’kh ph”、即ち、「慧水」については、『佛性海藏經』の「心動故則無寂靜。無寂靜故。名爲波浪。衆生如是。則無智慧水。無慧水故。身則垢穢」(大正藏八五、一三九七下)を参照せよ。また、「智水」という言い方も見られる。『華嚴經』の「菩薩受職。亦復如是。諸佛智水。灌其頂故。名爲受職」(大正藏一〇、二〇六上)や、『大日經義釋』の「如來智水。亦復如是」(二一頁)といった文を参照せよ。
- (14) この句は、“cnn ’sky k’cy ’wryzy”の還元である。この句は、そのまま、『大日經義釋』に、「微妙法水。從空而注。以淨其心器」(五四六頁)と見えるので、ソグド語の“’sky k’cy”は、マッケンジーの言うように、「空」の譯語と見られる。また、“’wryzt”という動詞は、『觀佛三昧海經』では、「下」の譯語として用いられているが、ここでは、「水が落ちる」の意味であるので、確かに原漢文は、「注」であったであろう。
- (15) 「灑淨」(ソグド語は、sn’y t)という言葉については、『大日經義釋』に、「如法灑淨」(二〇八頁、二一四頁)、「以香水灑淨」(二一一頁、二一三頁)などとあるのに據った。
- (16) ソグド語は、“m’yḡ ’YKZY prw m’t” (m’tにおけるがごとく)となっているが、“m’t”の意味は不明とされている。
- (17) 以下の部分と似た表現は、『楞伽師資記』に、「若能常作如是觀者。即是眞實懺悔。千劫萬劫。極重罪業。即自消滅」(二四一頁)、また、『大日經義釋』に、「是故。雖犯大罪。若於有巧方便者。則易消除」(三九二頁)と見える。
- (18) ソグド語の“prw ’yw ḡm’r’yck’ myḡ’ny”が、「於一念頃」の翻譯であることは間違いない。この表現は、しばしば見られるものであり、例えば、『華嚴經』に、「此菩薩。若發勤精進。於一念頃。得千億三昧」(大正藏一〇、一九二下)と見える。
- (19) 『維摩經』に、「彼罪性不在内。不在外。不在中間」(大正藏一四、五四一中)

と見えるのが参考となる。

- (20) ソグド語は、“wy wyspw wyn 't "p"y myδ'ny"である。“wyspw”は、『心王經』では、「一切」、あるいは「諸」の譯語として用いられている模様である。また、“p"y”は、明らかに、「觀」の譯語である（【二四】の註6、註7参照）。“wyn”は、一般に「見」の譯語として用いられ、『心王經』においても、九七行目、一七四行目では、明らかに、「見」の譯語と見られる。しかし、漢文の残っている一二四行目では、「觀」に對應しているので、「觀」の譯語として用いられる場合もあったのである。恐らく、この場合もそうで、類義語を二つ並べて、「いろいろ」という意味を表したのであろう。恐らく、それは、原漢文が「一切諸觀」とあったので、「一切」と「諸」を重ねるために、敢えて、このような翻譯を行ったものと思われる。なお、この「一切諸觀」という言葉は、『大日經義釋』に、「出過一切諸觀。自然智生」（三〇九頁）と見えている。
- (21) この表現はしばしば見られる。『法王經』の「我說此法。於諸法中。最爲第一」（一三九〇上）、『大日經義釋』の「於一切金剛義中。最爲第一」（二八五頁）や、「於一切心自在中。最爲第一」（三九七頁）などを参照せよ。
- (22) ソグド語は、“p w p'zn pw 'nβ'nt”である。マッケンジーは、“nβ'nt”を、サンスクリットの“nibandha”に当たるとする。このサンスクリット語は、元來、「結び付けること」、あるいは「束縛」の意味であるが、派生的には、「原因」の意味で用いられる。そして、その音寫であるソグド語の“nβ'nt”も、やはり、「因」、あるいは「緣」の譯語として用いられており、例えば、『法王經』のソグド語譯においては、「攀緣」や「緣起」の「緣」の譯語として用いられている（吉田2参照）。従って、ここの原語は、文字通り、「無心無緣」であつたと考えられる。ここでいう「緣」とは、「心」が對象物を捉えようとする活動を指し、全體は、「心も、その活動もない」という意味であらう。『楞伽師資記』に、『起信論』を引いて、「離心緣相」（六三頁）と言うのが参考になる。また、『心王經』の現存部分に「心不緣色」（【七】）というのは、「心」自体は否定されていないものの、その内容は、全く同じと見ることができよう。
- (23) 「前後際斷」は、“wβyw ZK pyrnmyck' 'PZY ZK pyšt r'yck' δwk' zr'yšt”の還元である。“zr'yšt”という動詞は、外に、『觀佛三昧海經』のソグド語譯に一例（一〇四頁）、『維摩經』のソグド語譯に三例（六行目、七行目、五五行目）見ることができる。『觀佛三昧海經』は、「絶」の譯語として用いられているが、ここでは、『維摩經』に倣って、「斷」に還元した。一方、“δwk'”は、『觀佛三昧海經』の三九九行目では、「世」の譯語として用いられているが、『大日經義釋』に、「以心前後際。俱不可

得故。……心王前後際。亦復如是。無前後際。以前後際斷故」（六四頁）とあるのに基づいて、この全體を、「前後際斷」に還元した。なお、『楞伽師資記』に、「又眞如自體相者。凡夫聲聞緣覺菩薩諸佛。無有増減。非前際生。非後際滅。畢竟常恒。從本性自滿足一切功德」（六三頁）とあるのも参照せよ。

(24) 「無有休息」は、“ $\beta y k p r m \quad L' \quad 'n c' y t$ ”の還元である。この表現は、『華嚴經』に、「思惟諸法。無有休息」（大正藏一〇、八八下）、また、『大日經義釋』に、「常作佛事。無有休息」（四六九頁）と見える。

(25) ソグド語、“ $w y t r w y \quad Z Y \quad s r y \beta t' m \quad k w t t r$ ”（煩惱の一族）の“ $k w t t r$ ”を「性」と還元することについては、【一四】の註3を参照。

(26) 「菩提芽」は、“ $p w \delta y \quad p' n' w \delta' k$ ”の文字通りの還元であるが、この言葉は、『佛性海藏經』に、「除去株朽盡。名之爲良田。菩提芽得生。由無根株故」（一三九二上）、『大日經義釋』に、「如劫燒火。無有遺餘。而亦即從此中得有牙生。所謂菩提芽也」（五一七頁）と見ることができる。

(27) この句のソグド語譯は、“ $' P Z Y \quad \xi y \quad Z K \quad w y c' w r t k \quad p r r' n p \quad w y n \quad \beta w t$ ”（そして、彼には、巧方便の見がある）である。しかし、恐らく、ここに名詞として現れる、“ $w y n$ ”（見）は、「現」という動詞の誤りであろう。つまり、原寫本が「現」の偏を脱落して「見」となっていたのを、翻譯者は、その誤りに気付かず、そのまま「見」と譯してしまったのである。しかし、それでは、動詞が足りない、そこで、ソグド語譯では、“ $\beta w t$ ”という動詞が補われたのであろう。いづれにせよ、この句は、上の「菩提法長」という句と對句であつたはずであり、「長」という動詞と對應する部分には、やはり、動詞の「現」が相應しい。

【二七】

夫頭陀僧者。先嘗調伏心馬。⁽¹⁾／善能調伏。⁽²⁾習熟警勒。⁽³⁾／心不逼迫。⁽⁴⁾坐禪幽寂。⁽⁵⁾／心安住。⁽⁶⁾意不動。⁽⁷⁾／心鏡明淨。⁽⁸⁾行／住調適。⁽⁹⁾若能如是者。所有／慧解。⁽¹⁰⁾不從他聞。⁽¹¹⁾／從心樹而。⁽¹²⁾智慧自長。伏內／外賊。破四種魔。⁽¹³⁾／見解現前。⁽¹⁴⁾身／心清淨。具足脩行。⁽¹⁵⁾／體達法相。自見說法。／不從文字。凡有所說。猶如虛／空。⁽¹⁶⁾爲說正語。不作妄語。⁽¹⁷⁾／聽衆開／悟。是佛化侶。⁽¹⁸⁾／暗冥衆生。一時／受記。⁽¹⁹⁾福慧莊嚴。⁽²⁰⁾／法利成就。（165-183）

(1) この句は、“ $\xi y \quad Z K w \quad \beta \delta' n h \quad p t \beta' y r y$ ”の還元である。残念ながら、“ $\beta \delta' n h$ ”も“ $p t \beta' y r y$ ”も、外に用例が知られていないので、その原語を比定することは難しいが、マッケンジーの推定する意味、即ち、“bridle”と“become accustomed to”によって、原語を想定し、それぞれ、「警勒」、「習熟」としておいた。これと似た考え方は、次のように、『佛性海藏經』に見える。

「若人馬不調。忍辱爲鞍勒。此人馬調順。能破煩惱軍」(一三九六上)。

- (2) 「逼迫」は、“r n'y”の還元である。このソグド語は、外には、『觀佛三昧海經』に出ており、そこでは、「馳散」の「馳」の譯語として用いられている。マッケンジーは、このソグド語の意味について、“r n- is translated 'urge', with a horse, real or metaphorical”とするので、今、假に、意味をとって、「逼迫」としておいた。

- (3) この部分のソグド語、“p w' r t w y r m n y”の“p w' r t”については、その意味が必ずしも明確ではないが(マッケンジーは、“secluded(?)”とする)、“w y r m n y”が「寂」の譯語と見られ、『二入四行論』に「始復端居幽寂。定境心王」(禪の語録1、四七頁)とあるのを参照して、「幽」の譯語と見ておいた。また、ソグド語の“δ y n y n y δ' y”については、“δ y n y”は、サンスクリットの“dhyāna”の音寫で、通常、漢語では、「禪那」と譯される。一方、“n y δ' y”は、明らかに「坐」の譯語であるので、全體は、「禪に坐す」の意味となる。これは、恐らく、漢語の「坐禪」の直譯であろう。

- (4) “w y r' m t k ' w s t y' y”、“L' y w z y”というソグド語の還元にあたっては、『華嚴經』の「常動修習方便慧。起殊勝道。安住不動。無有一念休息廢捨」(大正藏一〇、一九六中)に見える、「安住不動」という表現を参照した。また、『佛性海藏經』に、「國名安住。王名不動」(一四〇〇上)、『大日經義釋』に、「以心王安住。等同虛空。虛空常不動。而含容一切也」(四二四頁)と見えるのも参照せよ。

- (5) 次に掲げるように、類似した表現は多い。「證理達事。心鏡瑩淨。故云已離」(『華嚴經疏』、大正藏三五、五四一中)、「亦如磨銅鏡。鏡面上塵落盡。鏡自明淨」(『楞伽師資記』、一一二頁)、「天台頂尊者涅槃疏云。般若者。即是無上調御一切種智。名大涅槃明淨之鏡」(『宗鏡錄』、大正藏四八、四七三上)。従って、ここに見える、“Z K w p' z n " δ' y n' k”が「心鏡」の直譯であることは間違いない。なお、「明淨」については、【二〇】の註6を参照せよ。

- (6) “t r n β' y”と同一の表現が、『觀佛三昧海經』の一三二行目に“t r n ' β s' γ s' y'”と見える。この場合は、「調柔」の譯語として用いられているのであるが、『楞伽師資記』に「身心調適。能安心神」(二五五頁)と見え、また、『心王經』の現存部分にも「光如百千萬億日月。清涼調適」(【三】)とあるのを参照して、「調適」に還元した。

- (7) ソグド語は“c w " δ p r m γ w z n' k h β w t ' P Z Y γ r β t y”であって、このうち、“c w " δ p r m”は、ソグド語譯『維摩經』にも同一表現が見え、そこでは「諸有」の譯語として用いられている(一五九行目)。従って、ここでも、「諸有」、あるいは「所有」の譯語と見られる。“z n' k h β w t

- 'PZY r r β t y" は、他の箇所での譯語の使用例に沿って、そのまま、文字通りに漢字を當て嵌めれば、ここで還元したように、「慧解」となる。この言葉は、例えば、『大日經義釋』に、「發生無量慧解」（六一頁）と見える。しかし、「悟解」などの譯語である可能性もある。
- (8) "L' c n n ' n y ' p t r ' w s t k β w t" は、文字通り還元すると、このようになるが、『華嚴經』の、「即自開解。不由他教故」（大正藏一〇、八四中）や、「不從他教。自覺悟故」（同上、一八五下）などからすると、その原語が、「不從他教」などであった可能性もある。
- (9) この二句については、『維摩經』の「摧滅煩惱賊。勇健無能踰。降伏四種魔。勝幢建道場」（大正藏一四、五四九下）を参照。なお、"β t r ' y n c t" は、『金剛經』『維摩經』『觀佛三昧海經』のソグド語譯では、「降伏」「消伏」「折伏」などの譯語として用いられている。ただし、ここでは、一字であるべきであるから、「伏」、あるいは、「降」の譯語と考えられる。今、ここでは、假に、前者としておく。
- (10) ソグド語は、"ZK w y n ' t r w r r β ' y" であって、文字通り漢字を當て嵌めると「見解」となる。しかし、これも、「悟解」などの譯語であった可能性も否定しきれない。
- (11) 『達摩禪師論』に、「從本以來。身心清淨」（關口真大『達摩大師の研究』、四六五頁）、また、『觀世音經讀』に、「身心清淨。即坐道場」とあることによって、"ZK CWRH ' t ZK p ' z n ' w s ' w r t k ' PZY z p ' r t" の原語が、「身心清淨」であったことは、間違いない。なお、初期禪宗では、「身」と「心」、あるいは、「色」と「心」を對照的に論ずることがしばしば見られる。
- (12) ソグド語は、" ' m y n ' r t ' w s p y ' M ' n s " k y" である。マッケンジーは、これを、"of this righteous one, together with means" と譯している。" ' r t ' w s p y" は、『心王經』では、多く「修」の譯語として用いられ、また、" ' n s " k y" は、マッケンジーの推定に據れば、「（資）具」の意味であるというが、全體の意味は、よく理解できない。この句は、恐らく、下の「體達法相」（この句の還元は、ほとんど決定的）と對句であったはずであり、今、假に、「脩」と「具」という言葉が含まれる形で文句を補って對句を作り、「具足脩行」としておいた。
- (13) 『心王經』の現存部分に、「上品衆生。體達法相」（一四〇二下）と同一と見られる表現がある。従って、"k w m ' r y s y r p r ' y s t" の原語は、「體達」であったと考えることができる。これと類似した表現は、一九六行目にも見え、その原語も、恐らく、「體達」であったであろう。
- (14) 虚空の譬喩は佛典にしばしば見え、しかも、ほとんど常に、「由如虚空」「猶如

虚空」と表現されている。次に掲げる諸例を参照せよ。「由如虚空。本来不動也」（『心王經註』、一四〇三上）、「由如虚空。體性常淨」（『法王經』、一三八六上）、「猶如虚空。内外清淨」（同上、一三八八中）、「猶如虚空。容受一切」（同上、一三八九下）、「無量方便。猶如虚空」（『佛性海藏經』、一三九一上）、「猶如虚空。廣大無對」（同上、一三九二下）、「諸佛境界。畢竟清淨。猶如虚空」（『大日經義釋』、二七二頁）。

(15) ソグド語は、“my ḡnw w't δ'r "z'wnty δr r m h L' ḡk'r t”、即ち、「衆生に妄語させない」となっている。しかし、文脈から見て、使役である必要はないように思われる。しかも、これと同じ表現は、二〇〇行目にも見え、決まり文句であったようである。恐らく、これ全体で、「妄語しない」という意味であったのであろう。

(16) ソグド語は、“ZK c ḡmy wyc'wrtk βwt”（眼が智である）であるが、マッケンジーは、“wyc'wrtk”（賢い）を“wy ḡk'yrtk”（開いた）の間違いではないかと疑っている。とすれば、「開眼」となるが、やはり、漢文として不自然であり、今、假に、「開悟」とした。

(17) ここで「化侶」という漢語に還元したソグド語は、“pwt y prw m'n prw'yrt'y 'pstk'r'k”であって、“m'n prw'yrt'y”が「化」の翻譯であることは、先に述べた通りである（【二六】の註8を参照。なお、マッケンジーは、この一八〇行目に對する NOTES では、これが「化」の譯語だと述べている！）。また、“'pstk'r'k”は、「等侶」の譯語として用いられている例がある（ソグド語譯『維摩經』の七五行目）ので、ここでも「侶」と還元した。

(18) ソグド語の“kwr 'PZYn t'r'k βwt”を、「暗冥」に還元した。ソグド語譯『觀佛三昧海經』において、“kwr”が「冥」の譯語として用いられ（一八四行目）、また、『心王經』の一〇一行目において、“t'r'k”が「暗」の譯語として用いられていることが確かであるからである。この言葉は、『大日經義釋』に、「以此明普明照世間。除其暗冥」（三二二頁）、「爲欲照明脩眞言行菩薩。除其暗冥。是故說眞言王也」（五〇二頁）、『佛性海藏經』に、「世尊大智炬。能照闇冥處」（一三九五下）などに見える。

(19) ソグド語の“ZKwh 'ḡyh βyr'nt”は、文脈から見て、明らかに、「受記」の翻譯であり、同一の表現が二九五行目にも見えている。マッケンジーは、これを、そのまま、“obtains the memory”と譯しているが、これではどういう意味かさっぱり分からない。漢語の「受記」（名詞）は、ソグド語譯『觀佛三昧海經』では、“p r y w n”、即ち、「祝福」と意譯されている。『心王經』の翻譯は、餘りに直譯的にすぎ、恐らく、そのままでは、意味を作さないであろう。この事實

は、『心王經』の譯者が、「受記」というような基本的な用語の意味も知らずに翻譯に當たったのではないかと疑わせるものである。また、別の可能性として、譯者が中國人で、ソグド語に十分に通じておらず、漢文の一字一字をそのままソグド語に置き換えたということも考えられるのではなからうか。

- (20) この句のソグド語は、“prw δw' wkry ǰyrkrtyh 't ǰn'kh rw py'ty' βwt”である。“δw' wkry”（二種）については、ソグド語譯の際に補ったものとして、還元に當たっては無視した。“ǰyrkrtyh”は、『金剛經』のソグド語譯では、「福德」の譯語として用いられている。また、この『心王經』のテキストでは、“ǰn'kh”は、「慧」の譯語であるから、ここでは、「福德」と「智慧」という、いわゆる「二種資糧」が問題となっていることが分かる。ただ、ここでは、恐らく、その原語は、「福德智慧」を縮約した言い方である「福慧」であつたと思われる。この言葉は、例えば、『大日經義釋』に、「以能出生無盡福慧故」（二三七頁）と見えている。また、“rw py'ty' βwt”は還元しにくい言葉であるが、“py'ty”は、『維摩經』や『觀佛三昧海經』では、「嚴」や「飾」の譯語として用いられているので、「莊嚴」、あるいは、「嚴飾」などと還元される可能性があるが、『金剛般若經註』に、「世間財施福德。莊嚴色身。法施福德。莊嚴法身。福德智慧。此二法中。無所着。念念成道。故言不可思量者也」と、「二種資糧」と「莊嚴」を結び付けている例が見られるので、ここでは、「莊嚴」に還元した。

【二八】

又頭陀師者。／必須解三藏相。／三藏者。即戒定／慧⁽¹⁾是也。戒藏者。戒是食／相。若無食者。善惡／不⁽³⁾二。不二相即／是尸波羅蜜。是名戒藏。定／藏者。定是嗔相。若無嗔者。動靜不⁽⁵⁾二。／畢竟寂滅。禪定成就。是／名定藏。慧藏者。／慧⁽⁷⁾是癡相。癡相不生。／不生而生⁽⁹⁾。是真實慧。般若／成就。是名慧藏。如是體達⁽¹¹⁾。／名為三藏師。／師子吼師。化食嗔師。／大說法師。大頭陀師。大／精勤師。不妄語師。／大清淨師。大解脫師。／無攀緣師。大持戒師。／能為衆生。方便說法。／一一皆解。無生滅／心⁽¹⁴⁾。如實說法。不作／虛妄師⁽¹⁵⁾。（183-206）

- (1) ソグド語譯では、ここまでの意味が必ずしも明確でない。今、おおよその意味を汲んで、上のように譯した。
- (2) これ以下の部分は、次のように、宗密によって言及されている。「又心王經說三藏云。食相不生。是為戒藏。嗔相不生。是為定藏。癡相不生。是為慧藏」（『華嚴經行願品疏鈔』、續藏一一七、四〇九d）。

- (3) この一句のソグド語は、“rty L' ḡyr L' ʾnt'kk wnty 'PZYḡy ZK ḡw' wkry L' βwt” となっており、そのまま漢語に對應させると、「不善不惡不二」となる。これは、恐らく、「善と惡との區別がなくなった不二の境地」という意味であろうが、この言葉自体は、漢文として、甚だ不自然なものであるので、恐らく、ソグド語譯に際して、意味を明確にするために、言葉が補われているのであろう。
- (4) ソグド語譯では、この「定」に当たる部分が、“ZK pc'n”（その藏）となっている。しかし、原漢文では、上の「戒藏」に関する部分と對になっていたはずであるから、「定」であったと思われる。
- (5) 【10】の註2を参照。ソグド語約では、四行目との間に、多少、表現の相違が見られるが、恐らく、原漢文は同じであったと見てよいであろう。
- (6) ソグド語、“prβtm”は、六七行目では「究竟」としたが、ここでは「畢竟」に還元する。「畢竟」を“prβtm”と譯す例は、ソグド語譯『維摩經』の七〇行目に見える。そして、實際、その『維摩經』に、この「畢竟寂滅」という言葉を見ることができるのである（大正藏一四、五四四下）。
- (7) この「慧」についても、本節の註4の「定」と同様である。
- (8) 【27】の註13を参照。
- (9) ソグド語をそのまま漢文に直すと「食嚙師」となるが、【二六】の「煩惱師」と同様、この文脈に合わない（【二六】の註8を参照）。ただ、ここでは、ソグド語譯に「化」に当たる表現が見られないが、この箇所は、動詞の位置に問題があり、本文に亂れがあるようである（吉田豊氏の御教示による）。従って、ここでも、一四六から一四七行目に倣って、假に、「化」の文字を補った。
- (10) ソグド語をそのまま漢文に直すと「大法師」となるが、他と揃えて四字句とするために「説」の一字を補った。
- (11) 「精勤」は、“kwzpy”の還元である。このソグド語は、外に出現例がないが、『觀佛三昧海經』の六七行目では、「更精進」が、“prw kwzpy'w'y 'ntwrs'y”と譯されているのを参考にした。
- (12) 【27】の註15を参照。
- (13) ソグド語は、“pw βnt pw nβ'nt mwck'”である。これは、「βnt」も“nβ'nt”もない師の意味であるが、ここで問題なのは、“βnt”と“nβ'nt”の原語である。“βnt”は、ここ以外では、『究竟大悲經』のソグド語譯に、「縛」、あるいは「繫」の譯語として用いられている例がある（吉田1参照）。“nβ'nt”は、先にも述べたように、『心王經』では、「縁」の譯語として用いられている（【二六】の註22参照）。従って、ここでは、恐らく、この二語で、漢語の「攀縁」の一字一字をソグド語に當てて直譯したもの

であろう（これについては、吉田豊氏に御示唆を頂いた）。

(14) ソグド語の “prw r̥st̥k pr̥rnh ZKw δrm prβ'yrt” は、直譯すると「以實相說法」となるが、『摩訶般若經』に「但爲衆生。如實說法」（大正藏八、三九七上）とあるのに従った。

(15) ソグド語は、“z̥rm's'k mwck L' βwt” である。“z̥rm's'k mwck” は、「嘘をつく師」の意味であるが、上に「妄語師」に還元したソグド語、“my̥gnw w't̥δ'r "z̥'wnty δr̥rmh L' ̥k'r̥t mwck” とは表現を異にしているので、今、假に、區別する意味で、「虚妄師」としておいた。

【二九】

出家在家。四方⁽¹⁾／弟子。當如是行。十八種⁽²⁾。／隨於其身。常從乞食⁽³⁾。少⁽⁴⁾／欲知足。
正⁽⁵⁾中一食。／而⁽⁶⁾不二度。日⁽⁷⁾頭陀。愼行十二。／一處不住。離於聚落。不遠不近。／
住空閑處。或樹下。或塚⁽⁸⁾／間。至心慈念。於禪定中。／觀身實相⁽⁹⁾。不起雜念⁽¹⁰⁾。／善巧
方便。能安心王⁽¹¹⁾。／調伏其身⁽¹²⁾。擊大法鼓⁽¹³⁾。／摧伏外道⁽¹⁴⁾。入佛性⁽¹⁵⁾／海。息煩惱風⁽¹⁶⁾。／波
浪不起⁽¹⁷⁾。妄識不生⁽¹⁸⁾。／本性清淨⁽¹⁹⁾。佛宅中生⁽²⁰⁾。爲諸菩薩。／說頭陀法。（206-221）

(1) ソグド語は、“pr'y m'y δ δrm ̥w't”（このように法を行う）であり、「法」が「行」の目的語となっているが、恐らく、ソグド語譯に際して補われたものであろう。

(2) ソグド語は、“'mw 10 '̥st̥ r̥r'm'k CWRH nβ'nt δ'r't”（十八物を身邊に持し）であるが、『梵網經』の「此十八種物。常隨其身」（大正藏二四、一〇〇八上）を参照して還元した。

(3) ソグド語は、“nw̥̥'kw ZKw r̥wrt prw pyntp't r̥wyz't”（常に乞食によって食を求める）である。

(4) “kβnw k'm't 't β'wcy r̥rβ'yn'k β't” の原語が、「少欲知足」であったことは、疑う餘地がない。この言葉は、次に例を掲げるように、極めて頻繁に漢文佛典に現れている。

「少欲知足」（『十二頭陀經』、大正藏一七、七二一中）

「常脩少欲知足之行」（『心王經』、【七】）

「於世間法。少欲知足」（『維摩經』、大正藏一四、五五四中）

「是中。少欲知足。以爲對治」（『大日經義釋』、五一頁）

(5) 『増一阿含經』の「或時一食。或正中食」（大正藏二、五七九中）を参照した。

(6) この二句のソグド語譯は、“rty prw δ'wt' my̥δ my̥δ 12

y'wr 'nɾ'ǵ't" で、マッケンジーは、これを "and withdraw(?) twelve times each day in dhuta" と譯す。しかし、ここでの「十二」とは「十二回」の意味ではなく、頭陀の十二の項目を指すと考えるべきである。『十二頭陀經』の「阿蘭若比丘。遠離二著。形心清淨。行頭陀法。行此法者。有十二事」（大正藏一七、七二〇下）を参照せよ。恐らく、「十二の頭陀項目を、毎日、慎み深く行え」という意味であろうが、動詞、" 'nɾ'ǵ't" の原語が明確でない。今、假に、「愼行」としておいた。

- (7) ソグド語の "n'β 't p t t n w" は、「人々と街」という意味であり、これが、漢語の「聚落」の直譯であることは、意味から見て、間違いないであろう。
- (8) ソグド語譯では、この「住」('s k w' t) が、前の句に續いている。即ち、"c n n n'β 't p t t n w L' δ w r L' p n t 's k w' t"（聚落から遠くも近くもないところに住し）となっているのであるが、誤讀と思われる。
- (9) 以上の三句は、明らかに、『十二頭陀經』の「空閑之處」（大正藏一七、七二〇下）、「是故應受塚間住法」（同上、七二一中）、「在樹下住」（同上、七二一中）という表現を受けるものである。従って、ソグド語譯では、"w n t'k h"（樹）となっていて、「樹下」の「下」に當たる言葉がないが、還元に當たって補った。
- (10) ソグド語では、以上の三句を "p r w 'y w' r δ k w p'z n ǵ y r' k ǵ m' r' k h ǵ m' r' t 'w y . δ y" n y r t y 'm y h ɾ r' y w y Z K w "m t y c p r ɾ n h "p' y' t"（誠實な心で、慈念を思い、定の中で身體の實相を觀ずる）とする。このうち、先づ、" 'y w' r δ k w p'z n" を「至心」に還元した。この語は、『維摩經』（八四行目）では「一心」、『觀佛三昧海經』の一三四行目では「誠心」、同じく、一九四行目では「至心」の譯語として用いられている。また、"ǵ y r' k ǵ m' r' t"（慈念を思う）は、すぐ下で「不起雜念」と還元し、また、二三八行目で「不起異念」と還元したものと同一表現である。従って、"ǵ m' r' t" は、ここでも、「起」と還元しようが、ここでは、ソグド語譯の際に補われたものと見た。「慈念」は、「雜念」や「異念」とは異なり、そのままで動詞として用いるからである。
- (11) ソグド語は、"Z K w w y r' s t k ǵ m' r" L' ǵ m' r' t"（雜念を思わない）となっている。"w y r' s t k ǵ m' r" の原語は問題であるが、「阿之言無。無雜念生」（『金剛般若經註』）、「乃至魔宮美妙綵女。亦不能傾易其志。令生雜念」（『大日經義釋』、五六五頁）などに基づいて、「雜念」と還元した。
- (12) 還元に當たっては、『楞伽師資記』の「身心調適。能安心神」（二五五頁）という表現を参照した。
- (13) この「調伏其身」（Z K C W R H ǵ y r 'β s' ɾ s' t）という表現は、

明らかに三六行目の「調伏其心」(prw p'zn ḡyr 'βs'γsty)と對をなすものである。

- (14)『法華經』に、「此人不久。必當取草。坐於道場。破諸魔軍。當吹法螺。擊大法鼓」(大正藏九、五四下～五五上)とある。また、『大日經義釋』にも、「我當習種種無礙辯才。擊大法鼓。而警悟之」(五二頁)と見える。

- (15) ソグド語は、“myḡn βyk ywk ptk'wn ḡyn'yty βtr'ync't”(外教邪道を打ち負かす)である。恐らく、“βyk ywk ptk'wn ḡyn'yty”で、「外道」の譯語なのであろう。『心王經』の現存部分に、「摧伏外道」(【一】)という表現が見られ、原語は、これと同一であったと推測される。

- (16)「佛性海」(pwt'n'k kwtr sm'wtry)という表現は、『佛性海藏經』の具題である「佛性海藏智慧解脫破心相經」(一三九一上)に見ることができる。

- (17) ソグド語の“kwβ”について、マッケンジーは、その語源から、「泡」のことであろうとする。とすれば、原語は「泡沫」となろう。しかし、通常、中國の佛典で、この文脈で現れるのは「波浪」であり、「泡沫」ではない。例えば、『金剛三昧經』には、「如彼心地。八識海澄。九識流淨。風不能動。波浪不起」(大正藏九、三七〇中)と見える。従って、吉田豐氏は、『究竟大悲經』のソグド語譯に、漢文原典の「波浪」が、“rwβ”で譯されていることを見出し、これが“kwβ”の寫誤と考えられることから、『心王經』のこの部分に見える“kwβ”も「波」の意味だと述べられたが(吉田1)、これは、中國の佛教思想の傳統からいっても、全く妥當な意見であり、首肯できる。

- (18) ここで「生」に還元したソグド語は、“zy'y”で、『心王經』では、通常、「起」の譯語として用いられているが、直前に、「波浪不起」とあり(この還元は、上に引いた『金剛三昧經』の文から略ぼ確實)、重複を避ける意味から、ここでは、特に「生」に還元した。そして、この「妄識不生」という言葉は、實際、『心王經』の現存部分に見えている(【七】)。

- (19)『心王經』の現存部分に、「其光明中宣說。一切衆生。本性清淨」(【四】)とあるのに従った。なお、ソグド語譯は、“prw kwtr 'ws'γtk zp'rt βwt”で、「性において清淨となり」とあって、「本」に當たる語を缺いている。

- (20) “γ'n'kh”が、『心王經』では、「宅」の譯語と見うることについては、【二二】の註8を参照せよ。

【三〇】

爾時、心王菩薩⁽¹⁾告諸菩薩⁽²⁾。頭陀淨法。甚深⁽³⁾微妙⁽⁴⁾。於諸行中。最爲第一。我何⁽⁵⁾敢問如是事。然承佛神⁽⁶⁾力。從座而起。即叉手而。立於佛前。先⁽⁷⁾住心處。入於無量三昧。從三昧⁽⁸⁾起。解大衆⁽⁹⁾心。而白佛言。頭陀者。何故⁽¹⁰⁾從正月十五日。至三月十五日。脩行如是清淨功德。何⁽¹¹⁾故從八月十五日。至十月十五日。何故名爲頭之與陀⁽¹²⁾諸菩薩等。新蒙示教。心中致疑。爲大衆故。起慈悲心。開解疑⁽¹¹⁾結⁽¹²⁾。(221-235)

- (1) これについては、【一五】の註10を参照。なお、『法王經』にも、「如來所説。大乘實相。甚深微妙。無上良藥。入一乘諦」(一三八五上)とある。
- (2) ソグド語は、“wyspy” “rt'wyspy”である。“rt'wyspy”はこの經典では、主に、「脩」の譯語であるが(【二六】の註12参照)、文脈から見て、「行」の譯語と見るべき場合もある(【二五】の註4参照)。ここも、その例である。
- (3) 『心王經』の現存部に、「心王菩薩。承佛神力。身昇虛空。變現自在」(【三】)とあるのに倣った。
- (4) 『金剛三昧經』の「從座而起。叉手合掌」(大正藏九、三六七上)参照した。
- (5) “p'zn wy"ky”を、文字通り、「心處」に還元した。この言葉は、『二入四行論』に、「動看心處是寂滅處」(禪の語録1、一七八頁)、また、『大日經義釋』にも、「若以十緣生。了知心處。則安住其中。故曰無等等句」(七九頁)、「若能入此阿字門者。即能識於心處。若知是處。即得眞言之果也」(四三六頁)と見ることができる。また、「念處」という言葉も、次に掲げるように、しばしば見ることができるので、原語が「念處」であった可能性もある。「動處常寂。寂即無求。念處常眞。眞無染著」(『楞伽師資記』、六八頁)、「若生念處。即須當斷」(『法王經』、一三八六下)、「豈悟念性本空。焉有念處」(『傳法實紀』、四二〇頁)などを参照。また、“w'sty”は、一六八行目より、「住」の譯語と見られる。
- (6) 『佛性海藏經』に、「爾時。如來說是語已。即入三昧。從三昧起。放大光明」(一三九二中)とある。
- (7) 【二五】の註1を参照。
- (8) 以上の記述は、ポール・ドミエヴィルの言うように、明らかに『梵網經』の次の文に基づくものである(Demi.p240)。「頭陀者。從正月十五日。至三月十五日。八月十五日。至十月十五日」(大正藏二四、一〇〇八上)。
- (9) この「諸菩薩等」は、ソグド語の“pwtystβ” (「菩薩」)の複數形、“pwtystβty”の還元であり、この表現は、『心王經』の現存部分に見ることができる(【五】)。

- (10) ソグド語は、“⁽¹⁾wy p'zny rw δβnnh 'sty” (心の中に疑いがある)であるが、『佛性海藏經』の「一切衆生。如名窮子。以是之故。心中致疑」(一三九五中)という表現に倣った。
- (11) ソグド語は、“⁽²⁾rwyc kwn' KZNH 'PZY βwrs'nt”で、この動詞の原語が明らかでない。“⁽³⁾rwyc k”は、『心王經』では、「開」の譯語として用いられている(【二一】の註6参照)。また、“⁽⁴⁾βwrs'nt”は、ソグド語譯『究竟大悲經』では、「離」の譯語であり(一一四行目。吉田1参照)、『觀世音菩薩祕密藏如意輪陀羅尼神呪經』のソグド語譯では、「解脱」が“⁽⁵⁾cnn βzy' βr's βwrs'nt”と譯されている(二〇行目)。従って、「離」「脱」「解」などが、その原語であつたと推測される。従って、ここでは、一應、「開解」と還元しておいたが、なお、疑問が残る(漢文佛典によく現れる表現としては、「決疑」がある(『佛性海藏經』、一三九五中など))。
- (12) “⁽⁶⁾rr'n s̄”は、「結」の譯語と認められる。【一七】の註1を参照。

【三一】

爾時。世尊告心王菩薩。／汝能問我。我亦答汝。⁽¹⁾／衆悉歡喜。諦聽。／心中不起異念。⁽²⁾
 我爲汝說。／所以頭陀法從正月十五日／始者。衆生垢重。從長／劫來。常行顛倒。⁽³⁾如
 今照／見。五陰皆空。無自性／時。以法相故。如智自照。⁽⁴⁾／成五法身。得一切智。⁽⁵⁾／
 照明迷暗衆生暗心。⁽⁶⁾／心地是正。常入三昧。⁽⁷⁾／法相知見。猶如春日。故／爲正月。所
 以至三月十五日者。⁽⁸⁾／法非實相。不得互解。⁽⁹⁾／前心生而。不緣／後心。⁽¹⁰⁾以是之故。無
 所心住。⁽¹¹⁾／心相不生。即是實相。三／毒清淨。畢竟無餘。⁽¹²⁾得三解脱。／故爲三月。
 (235-254)

- (1) ここで「答」に還元したソグド語は、“ZKw pcβ'nt s̄yr wn'n”であつて、一四行目、四四行目で「答」に還元した表現、“⁽¹⁾pcβ'nt βr'”とは、多少、表現に違いが見られる。しかし、ソグド語譯『維摩經』においても、「答」が、“⁽²⁾pcβ'nt wn'n”(二一行目)、“⁽³⁾pcβ'nt βr'”(六五行目)と二通りに譯されている。
- (2) 【二一】の註8を参照。
- (3) 『大乘開心顯性頓悟真宗論』の「若不識自心。即行種種顛倒」(「松ヶ岡文庫研究年報」第三號、一八七頁)を参照せよ。
- (4) 「照見」は、ソグド語の“⁽⁴⁾s̄m'r'nt”の還元である。このソグド語は、『心王經』では、「思」「思惟」「思念」などの譯語と見られるが、『大乘五方便北宗』の「五陰爲世界。照見五陰空。故名出現於世」(『鈴木大拙全集』第三卷、二〇三

頁)を参考にした。

(5) ソグド語の “ny δ cw nyst p δ kmyn cw β wt” (法であるものは何もない) の原語ははっきりしないが、『注大乘入楞伽經』に、「五陰皆空。無自性相」(大正藏三九、四六七下)、また、『金光明最勝王經疏』に、「又普賢觀經云。以此五蘊空。無自性」(大正藏三九、二四五下)とあるように、「五陰皆空」と續けて「無自性」という言葉が現れる場合がしばしば見られるので、今も、それに従った。しかし、「無所有」「不可得」「無我」「無所得」などの翻譯であった可能性もある。

(6) ソグド語は、“m'y δ ZK ʔ n'kh ɾ wty wc'ɾ ty β wt” である。“m'y δ” は、『心王經』では、十一箇所に用いられているが、成句と見られる二九〇行目を除いて、全て、「～のよう」、即ち、「如」、あるいは、「猶如」の譯語と認められる。従って、ここでも、それに倣って、上のように還元した。しかし、もし、果たして、このソグド文がこの原漢文の翻譯であるとすれば、誤譯と見なくてはならないだろう。というのは、原漢文がこのようなものであったとすれば、この文の「如」は、「ごとし」の意味ではなく、「眞如」の意と見るべきだからである。なお、“ʔ n'kh” は、『心王經』では、一般に、「慧」の譯語であるから、「如慧」とすべきであるが、すぐ下に、“wyspw ʔ n'kh” という語が見え、これは、「一切智」と還元されるべきものであるから、この段落では、「智」の譯語として用いられているようである。「如智」という言葉については、次に掲げるように、しばしばその用例を見ることができる。「行如來事者。如智照如理爲事」(『妙法蓮華經文句』、大正藏三四、一〇九中)、「若後宗言唯如智者。以心即同眞性。故曰唯如。照用不失。故云如智」(『宗鏡錄』、大正藏四八、六一〇中)。また、“ɾ wty wc'ɾ ty β wt” は、言葉本來の意味は、「自分自身賢い」であり、“wc'ɾ ty” は、『心王經』では、「智」「利」「巧」などの譯語として用いられている模様であるが、いづれも、この文脈に合わない。今、假に、文脈に合わせて、「照」という漢字を用いて、「自照」と還元した。

(7) 本節の註6を参照。「一切智」という言葉は、初期の禪宗においても用いられている。『楞伽師資記』の「知所無知。乃名一切智」(一九九頁)を参照。なお、動詞は、ソグド語譯では、“spt'k” (「成」) が用いられているが、すぐ直前に「成五法身」(こちらの「成」は “sptk β wt” の還元である) という表現があるので、同じ單語を用いるのは、漢文の修辭上、好ましくない。そこで、ここでは、「智」に對して、一般に用いられる動詞である、「得」を採用した。

(8) ソグド語は、“t'r'k ptk'wn” であり、“t'r'k” が「暗」の譯語であることは、一〇一行目によって略ぼ確實である(【二二】の註8参照)。一方、

“p t k'wn” は、『心王經』では、文脈より、「邪」の譯語と見られるが、「暗邪」は熟しない言い方である。そこで、『佛性海藏經』に、「由此三毒酒。迷闇失正道」（一三九二上）、「爲度迷闇故。說身有七神」（一三九八上）と見えるのを参照して、「迷闇」と還元した。しかし、「闇昧」などの翻譯である可能性もあるであろう。この言葉は、『大集經』に、「唯願憐愍。演說正法。調伏一切。闇昧衆生」（大正藏一三、一三八上）と見える。

- (9) 「心地」(p'z n z'y h) については、「我已百劫。修行是心地」（『梵網經』、大正藏二四、一〇〇三中）、「神動清利。心地明淨」（『楞伽師資記』、二五五頁）、「圓覺疏序云。……衆生之本原。故曰心地。諸佛之所得。故曰菩提」（『宗鏡錄』、大正藏四八、九五二下）などを参照。

- (10) ソグド語の “w c' r t k w y n t” は、そのまま譯せば、「賢く見る」という意味となる。マッケンジーは、原語として、「明見」を考え、漢語の「明」に “clearly” と “intelligently” の二様の意味があるから、“sees clearly” と譯すべきを、誤って、“sees intelligently” と譯したのだらうという。しかし、『心王經』では、“w c' r t k” は、多く、「智」の譯語として用いられているので、恐らく、その原語は、「知見」であろう。この言葉は、『修心要論』の引用（【九】）によって、『心王經』においても用いられていたことが分かる。しかし、ソグド語譯は、この言葉が、「法相」(δ r m'y k p r r n h) を目的語とする動詞として用いられているのは不審である。「知見」という言葉は、『法王經』に、「以解脫故。則能知見」（一三八七頁）というように、動詞として用いられることもあるが、それは極く稀で、通常、【九】のように、名詞として用いられるからである。あるいは、漢文の原寫本に問題があったのではなかろうか。今は、「知見」を名詞とし、「法相」は、その形容と解した。

- (11) 『楞伽師資記』に、『涅槃經』を引いて「又云。有善光故。猶如夏日」というのが参考となる（二〇五頁）。

- (12) ソグド語の “'y w δ y β t y' r δ n y w L' r r β' n t”（おたがいに理解しない）の原語は比定することは非常に難しい。今は、假に、言葉通り、漢字を當て填めて、「不得互解」としておく。しかし、「互解」という言葉は不自然なので、「融即」「融通」「俱融」「交徹」などといった特殊な用語の翻譯である可能性が高い。

- (13) ソグド語の “p y r n m'y c k' p'z n”、“p y ḡ t r'y c k'” を、それぞれ「前心」「後心」と還元した。前者は文字通り「前の心」の意味である。後者は「未來」の意であるが、次に掲げるように、「前心」と對照させて「後心」を論ずることは佛典にしばしば見られるからである。「生死無常。涅槃常。前心無常。後心常。故是有所得。今明諸法未曾常無常」（『涅槃經遊意』、大正藏三八、二三

二下)、「若以至理而論之。前心造後心報。何有脫時」(『少室六門』、大正藏四八、三七二下)、「前心次後心。心心云何除」(『佛性海藏經』、一三九三上)。
 なお、「前心」「後心」については、その原語が、それぞれ「前念」「後念」であった可能性も否定できない。「前念後念。念不相違」(『法王經』、一三八六下)、「前念後念。並合聖心。故言如是如是」(『金剛般若經註』)などを参照。なお、マッケンジーは、“n β n t”を“hinder”と譯すが、ここでは、前の心が後の心の因縁となって、次々に想念の流れを作り出すことがない、という意味であろうから、「縁」の譯語と見るべきである。これが、「縁」の譯語として用いられることについては、【二六】の註22を参照せよ。

- (14) ソグド語では“Z K Z Y L' β w t r t y p' z n p r r s t y”で、「全て無くなっても、心は残る」の意。原語は想定しにくい。今、暫く、原漢文に「無所心住」(心を止むべき対象がない)とあったのを、「なにもないところに心が止まる」と誤解して譯したと見て、このような還元漢文とした。「心を止むべき対象がない」という意味であれば、上の「前心生而。不縁後心」という文とよく合致することとなろう。
- (15) ソグド語は、“k' w p r β t m p w r γ m' k”である。“p r β t m”が「畢竟」の譯であることは、【二八】の註6を参照。また、“p w r γ m' k”は、九九行目で、「無有遺餘」と還元したのと同一の表現であるが(【二三】の註7参照)、ここでは、字數の關係で、「無餘」に還元した。

【三二】

所以從八⁽⁴⁾月十五日者。衆生於八聖⁽⁵⁾道。起八邪風⁽⁶⁾。心地⁽⁷⁾動搖⁽⁸⁾。妙藥⁽⁹⁾不長⁽¹⁰⁾。草穢⁽¹¹⁾生起⁽¹²⁾。／然若行者。以善方便。初⁽⁴⁾除其根⁽⁵⁾。本自不生⁽⁶⁾。／心相清淨⁽⁷⁾。不動如⁽⁸⁾山⁽⁹⁾。法王妙藥。自然而出。／衆生食之。八風疾⁽⁹⁾息⁽¹⁰⁾。八解脫現。故⁽¹¹⁾爲八月⁽¹²⁾。所以至十月者。／行者脩行。十⁽⁹⁾念成就⁽¹⁰⁾。長養聖胎⁽¹¹⁾。／成諸根力⁽¹²⁾。無煩無憂。猶如⁽¹¹⁾明月⁽¹²⁾。熱中與涼。息煩⁽⁹⁾惱憂⁽¹⁰⁾。故爲十⁽¹¹⁾月⁽¹²⁾。(254-270)

- (1) これに似た表現はしばしば見ることができる。「世間八風。不能動搖」(『大日經義釋』、二〇頁)、「八風吹不動者。眞是珍寶山也」(『修心要論』、大正藏四八、三七八下)、「最上乘論」)、「能於行住坐臥。及對五欲八風。不失此心者。是人梵行已立。所作已辦。究竟不受生死之身。五欲者。色聲香味觸。八風者。利衰毀譽稱譏苦樂」(同上、三七九上)、「若無心者。八風不能動也」(『禪源諸詮集都序』、大正藏四八、四一一下)、「善男子。譬如有人。依須彌山。假使八風不能吹動。依善知識。亦復如是。八難之風。不能吹動」(『法句經』、大正藏八五、一

四三四下)、「觀心常居法性。不爲八風之傾動。猶如彌山」(『觀世音經讀』)、「問。是沒是不動。答。八風吹不動。問。是沒是八風。八風者。利衰毀譽稱譏苦樂」(『大乘無生方便門』、『鈴木大拙全集』第三卷、一七四頁)など参照。なお、これらの文では、「八風」を「利」「衰」などの八としているが、ここで、「八聖道」に對して、「八邪風」という表現を用いているのは、「邪風」「邪思惟」などを示す「八邪」という言葉を念頭においたものであろう。

- (2) 『法王經』にも、次のように、「妙藥」の譬喩が出ている。「願佛慈悲。爲說大乘決定眞實。令此衆生得眞妙藥。療諸毒病。悉令得愈」(一三八四下)。ここからも、「p'r'r'rz」が「妙」の譯語であることが知られる。
- (3) ソグド語の「nry kysn'k」は、非常に原語を想定しにくい言葉であるが、今は、假に、『涅槃經』の「時有一人。善知方便。語貧女人。我今履汝。汝可爲我。芸除草穢」(大正藏一二、四〇七中)という文に據って「草穢」に還元した。この語は、また、『大日經義釋』にも、「慈如廣植嘉苗。悲如芸除艸穢」(二三頁)と見える。
- (4) この文獻に特徴的な、脩行者を示す言葉、「δynδ'r mrtγm'k」をいかに還元するかは問題であるが、『法王經』に、「佛即収光。語諸大衆言。諸行者。我欲入涅槃寂。時欲將至」などと、「行者」という名稱が用いられているので、今も、それに倣った。この「行者」という言葉は、『大日經義釋』などでも、しばしば用いられている。なお、『金剛般若經註』には、「行人」が用いられており、原語が、この「行人」であった可能性もある。
- (5) ソグド語譯は、「cnn "r'zy m'gky ZKw wyrh 't βyz'k 'βgkrt」となっている。「m'gky」は、『心王經』では、漢文の「諦」の譯語として使われているので(五五行目、九四行目、九五五行目)、「初めの諦から根を除く」の意となるが、どうしてここに「諦」が出て来るのか分からない。次の句にも、やはり、この「"r'zy m'gky」(初めの諦)という言葉が見えるが、やはり意味不明である。しかし、文脈から見て、恐らく、この「m'gky」には明確な意味はないのであろう。とすれば、すぐ下の二七〇行目に「cnn "r'zy」という言葉が見えるが、「cnn "r'zy m'gky」は、これと同じ意味と見てよいであろう。従って、還元するに当たって、いずれの場合も無視した。
- (6) この句のソグド語は「rtykδ ZK "r'zy m'gkh L' rwδt」である。これは、「初諦が生長しないならば」という意味であるが、意味不明であり、恐らく、何らかの誤解があるのであろう。ここでは、上の「初めに根を除いてしまえば」という句を受けて、「初めから生長しない」の意味と考へて、「本自不生」に還元した。なお、この句については、例えば、金剛藏菩薩の『金剛般若經註』

に、「煩惱之性。本自不生。何所論滅。本自論無」と見える。「rwδt」は、「ひとなる」の意味で、「長」「生長」の譯語として用いられるが、「生長」の意味での「生」の譯語としても用いられうるであろう。

(7) 以下のいくつかの例を参照せよ。「心不動如山。脩智慧」(『觀世音經讀』)、「其心不動如山王。不可傾覆猶大海」(『華嚴經』、大正藏一〇、一八〇上)、「持戒不動如須彌」(同上、二〇一下)、「不動如須彌。是名見諦也」(『大日經義釋』、五二五頁)、「猶如須彌山王。無有動搖也」(同上、五二六頁)。

(8) “r'β” は、『心王經』では、ここだけに現れる。「病氣」の意味で、ソグド語譯『維摩經』では、「病」「疾」の譯語として用いられている。今は後者に従った。

(9) 「長養聖胎」という言葉については、『江西馬祖道一禪師語錄』に、「若了此意。乃可隨時著衣喫飯。長養聖胎。任運過時。更有何事」(禪文化研究所『馬祖の語錄』二一頁)と見え、また、良賁の『仁王護國般若波羅蜜多經疏』にも、「解曰。明所依忍。長養聖胎。堅固不退。信位及心。結三不退」(大正藏三三、五一二中)と見える。なお、「長養」という言葉は、『心王經』の現存部分にも使われている(【八】)。

(10) ソグド語は、“wyspw wyx βyz'k z'wr”。“βyz'k” は、『心王經』では、單獨では、「種」の譯語として用いられるが(九七行目、一五三行目)、“wyx βyz'k” と熟して用いられる場合、「根」の譯語と認められる。従って、ここでも、「諸根力」と還元されるわけであるが、この言い方は、必ずしも、よく見られるものではないので、なお、疑問が残る。

(11) ソグド語は、“pw wytṛwy pw 'nt'wrc”。“wytṛwy” は、「煩惱」の「煩」の字の譯語として、廣く一般に用いられている。一方、“'nt'wrc” は、他には、『心王經』のすぐ下の部分に、もう一例見られるのみで、原語を比定することが難しいが、一應、マッケンジーに従って、「憂」としておく。因みに、類似した言葉である「苦」は、『維摩經』や『究竟大悲經』のソグド語譯では、“'βzy'” “'βyz'” と譯されているので、「苦」ではあるまい。

(12) 太陽が熱を放つのに對して、月は涼しさを與えるものと考えられていた。『華嚴經』の「譬如月光。照衆生身。令得清涼」(大正藏一〇、一九五上)、『大日經義釋』の「如說日可冷月可熱。佛說苦諦不可令異」(一九六頁)という文を参照せよ。

【三三】

又頭者。行者／初破煩惱。⁽¹⁾ 懸大／法鼓。⁽²⁾ 摧煩惱賊。／得賊頭主。若賊無王。／無由依
⁽³⁾ 持。行者直欲出家。⁽⁴⁾ 爲我弟子。／攝心脩學。／身心清淨。悟無生忍。⁽⁵⁾ 是故爲頭。陀

者、／後心行者。慈善方便。難得前／心。⁽⁶⁾慮後多忘。若陀汰之。⁽⁷⁾／即是漏心。名爲煩惱。行者／努力努力。前心爲後。後／心爲前。前後不二。即／是正法。受持佛法。⁽⁸⁾／無所忘失。⁽⁹⁾是故名陀。／煩惱所覆。如／鑄藏金。先去其龜。眞／金顯現。⁽¹⁰⁾（270-287）

- （１）「煩惱賊」という用語は、『維摩經』などに見ることができる。「以智慧劍。破煩惱賊。出陰界入」（『維摩經』、大正藏一四、五五四中）、「摧滅煩惱賊。勇健無能踰」（同上、五四九下）、「善知識者。是汝弓箭。射殺汝等煩惱賊故。善知識者。是汝勇將。能破汝等生死軍故」（『法句經』、大正藏八五、一四三三下～一四三四上）など参照。ここに、「摧」と還元したのは、“syδt”である。この語は、他に全く出現例がないが、文脈より見て、「打ち負かす」の意味であることは間違いない。しかし、「破」や「降伏」は、別の言葉で譯していると考えられるので、ここでは、それ以外の言葉と考えて、「摧」とした。なお、【一五】の註９参照。
- （２）この部分については、湛然の『止觀輔行傳弘決』に、「如鹽官忍禪師造頭陀經云。頭謂煩惱頭主。陀謂陀汰煩惱」（大正藏四六、二六二下）、また、同じく『止觀輔行傳要記』にも、「如鹽官忍師釋頭陀云。頭謂頭主。陀謂汰」（續藏二一四、一五八c～d）と言及されている。従って、“myn s'n sry ZKw 'βǝ'yws”（敵の頭、主人）というソグド語の原語が「賊頭主」であったことは疑いえない。
- （３）ソグド語は、“pw'nwth βwt”で、「支えがない」の意味であるという。還元しにくいが、今、假にこのようにしておく。
- （４）ソグド語は、“k'mt nyǝ'y'y”で、「出ようとする」というだけであるが、マッケンジーが、“wishes to go out (from his home)”と譯しているように、「出家」の意味と考えられるので、「家」という言葉を補った。なお、ソグド語譯『觀佛三昧海經』の一六五行目では、「出家」が、文字通りに、“cnn kty'kyh nyǝ'y't”と譯されている。
- （５）“ZKw n' "z'y't wyn”は、文字通り、漢字を當て填めると、「不生見」となるが、マッケンジーの言うように、「無生忍」の譯語であろう。なお、動詞は、“βyrt”となっているが、これは、通常、「得」の譯語として用いられている。しかし、『心王經』の現存部分に、この部分と全く同じ、「身心清淨。悟無生忍」という句が見えるので、ここでも、「悟」と還元した。
- （６）“ǝm'rt”は、『心王經』では、一般に、「思」や「思惟」などの譯語として用いられているようであるが、ここでは、「後のことを思う」という意味であるので、特に「慮」に還元した。
- （７）一應、ソグド語の“pn'yǝt”を、湛然の引用に見える「陀汰」の譯語と考

えて、このように還元した。湛然の言うように、どこかに、この「陀汰」という言葉がないと、「陀」と呼ばれる理由の説明にならないからである。“pn'yǝt”は、『觀佛三昧海經』のソグド語譯、三九二行目において、「失」の譯語として用いられており、漢語の「陀汰」は、他に見えない用語であるので、その意味は必ずしも明確ではないが、「陀」が「墮」に通ずるとすれば、「失」という言葉と、意味的に、それほど離れたものではないであろう。ただ、このように還元した場合、湛然の引用文と、文脈が必ずしも一致しないが、それは、湛然の引用が、記憶に基づくもので、原文に忠實ではなかったためと考えることができよう。なお、ここで注意すべきことは、「陀汰」を、“pn'yǝt”というソグド語に當てたことによって、ソグド語譯では、原典の元來の意味が完全に失われてしまっている、ということである。原漢文は、單なる附會、あるいは、「駄洒落」といった修辭によって議論を展開しているが、このような修辭自體は、決して他の言語にそのままの形で翻譯不可能であるので、このようなことも、やむを得ないとも言えるが、この修辭こそは、この經典の最も肝心要のところなのであるから、この翻譯では、假に、どんなに精讀しても、經典の狙いは、把握できなかったはずである。

- (8) 「前後不二」という言葉自體は、『大般涅槃經義記』に、「四是牛食噉草因緣下。廣前第二前後不二」(大正藏三七、七〇三中)と見える。ただ、この言葉の示す思想内容については、以下の諸文を参照すべきである。

「前念後念。念不相違。即得順理。不起無明」(『法王經』、一三八六下)

「前念後念。並合聖心。故言如是如是」(『金剛般若經註』)

「前心行行合實相理。若當來者。只是後念。心心無間。速與理應。故言以佛智慧悉知是人悉見是人也」(同上)

「十方諸佛。同共一法身。前心既成聖了知。後念即座道場。故言如來悉知是人。得道人。見之言證。證實相理。故言悉見是人也」(同上)

「又初心不異後心。初入法界時大空。還是究竟法界時大空」(『大日經義釋』、二七二頁)

「以祕藏之中。初心勢力不異後心」(同上、三〇七頁)

- (9) ソグド語の“n't p t r r β t y”は、文字通りには、「はっきりと受け取る」の意味である。“n't”は、“n't n r'wǝ” (はっきりと聴け)の場合は、明らかに「諦」の譯語であるが、「諦受」という用例は見当たらない。恐らく、ここでは、“n't”は「しっかりと」という意味であろう。そこで、「受持」という漢語に還元した。この用語については、例えば、『華嚴經』に、「若有衆生。受持正法。悉能除斷。一切煩惱」(大正藏一〇、六八上)などと見えている。
- (10) この一句は、“Z K Z Y n y δ c w L' p r' y c y L' β r' w c y w n t y”というソグド語の還元である。“p r' y c y”は、「捨てておく」、

“βr'wcy wnty”は、「忘れる」の意味であるが、それぞれ、「失」と「忘」という漢語とよく対応するので、「忘失」と還元した。この言葉は、『法華經』に、「其人若於法華經有所忘失一句一偈。我當教之與共讀誦。還令通利」（大正藏九、二八一中）、また、『大日經義釋』に、「然餘法。若不善聽致忘失。其過猶小」（五二〇頁）と見える。

- (11) この譬喩は、佛典では、しばしば見られるものであるが、今は、『宗鏡錄』の文、「如鑄藏金。金非鑄有。又非銷得。要以銷成」（大正藏四八、五四五下）に倣った。また、原漢文が「如在鑄金」などであった可能性もある。この言葉は、『法性論』（『鈴木大拙全集』第二卷、四四四頁）や『華嚴經行願品疏』（續藏一七七一三〇五d）などに見える。

【三四】

爾時。大衆聞／佛慈悲爲說。／諸惱結⁽¹⁾盡。無明⁽²⁾藏開。／無數心寶。自然／圓滿⁽⁴⁾。爾時。諸菩薩思惟。我等今得未曾有⁽⁵⁾之妙寶。／十方界有諸佛甚深法藏⁽⁶⁾。／不可思議。此是一切諸佛⁽⁸⁾。慈／悲願力⁽⁹⁾。令我等脩道受／記。……讀歎／……與／……（287-298）

- (1) 「盡」は、ソグド語の“m'y'ms”の還元である。この語自体は、他に見えないが、ソグド語譯『維摩經』の一八二行目において、「盡」が“y'mt βwt”と譯されているので、ここの“m'y'ms”も、「盡」の譯語と見られる（【一七】の註五を併せ参照せよ）。なお、ソグド語譯では、この“m'y'ms”の前に、“rwt y”（自づと）があるが、次の句と對句であつたはずであるから、ソグド語で補つたものと見て省略した。また、「惱結」（sryβt'm r'r'nš）については、【一七】の註1を参照せよ。

- (2) 「無明藏」（pw rrwšny pc'n）という語の用例は、『宗鏡錄』に見ることができる。「入無明藏。無所覺知。皆悉清淨。無所障礙」（大正藏四八、四九一下）。

- (3) ソグド語の“m'ny rδ'k r tny”（心の欲に應じる寶）は、通常、「摩尼寶」（如意寶）の譯である。しかし、ここでは、「無明」を「藏」に喩えるなど、抽象的な議論がなされているので、「摩尼寶」という具體的なものが出てくるのは、文脈上、不適當であろうと思われる。そこで、ここでは、『宗鏡錄』に、「是以。祖師云。一切寶中。心寶爲上」（大正藏四八、四六六中）というのを参照して、一應、「心寶」と還元しておいた。翻譯者が、この言葉を「如意寶」の意味に誤解したとも考えられるからである。

- (4) ソグド語は、“m'yδ rwt y prw CWRH trw'rc”で、「自

づと身體に満ち溢れる」といった意味であるが、今は、『修心要論』の「妄念不生。我所心滅。一切功德。自然圓滿」（大正藏四八、三七八上く『最上乘論』）という文に據った。恐らく、“prw CWRH”（身體に）は、ソグド語譯の際に補われたものであろう。

- (5) ソグド語の “ny'wr L' byrt 'st byr'ymn” は、意味から見て、漢文佛典の決まり文句である、「得未曾有」の譯であろう。この句は、例えば、次に掲げるように、實にしばしば見ることができる。

「爾時。千二百阿羅漢。心自在者。作是念。我等歡喜。得未曾有。若世尊各見授記。如餘大弟子者。不亦快乎」（『法華經』、大正藏九、二八中）

「心大欣懽。得未曾有」（『金剛三昧經』、大正藏九、三六七中）

「聞說是已。心生踊躍。歡欣而立。而白佛言。……身意決然。得未曾有」（『佛性海藏經』、一三九五下）

「時諸大衆。得未曾有。生奇特想。默然而住」（同上、二〇八上）

- (6) “10 kyr'n βwmh” は、外では、ソグド語譯『維摩經』の一〇二行目や、同じく、『觀佛三昧海經』の二一六行目、二四七行目、二八五行目にも見ることができ、『維摩經』では「十方」、『觀佛三昧海經』では「十方界」の譯語として用いられている。ここでは、『觀佛三昧海經』に従って、「十方界」に還元した。

- (7) 『華嚴經』に、「又得諸佛甚深法藏」（大正藏一〇、一九五上）という文が見えるので、ソグド語の “pwt'yǵty rwyz'w nyx δrm pc'n” という表現は、文字通り、「諸佛甚深法藏」と還元されるべきである。

- (8) 「願力」は、“rδ'k z'wr” の還元である。“rδ'k” は、四二行目では、「四弘誓願」の「願」の字の譯語として用いられている。従って、ここでも、「願」に還元した。

- (9) 【二七】の註19を参照。

むすび

以上、諸資料に基づく、『心王經』の復元本文を、その根據とともに掲げた。これは、今までのところの、私の一應の成果に過ぎず、なお、完全というには程遠い状態であるが、今後、逸文の発見も期待されるであろうし、ソグド語譯の還元については、私の非力のために、とんでもない誤りを犯しているのではないかと危慮される。『心王經』の初期禪宗史における重要性を窺う時、そのより完全な本文を得ることは、禪宗史解明のための必要不可欠な前提であるとも言えよう。そのために、是非とも讀者諸賢の御教示と御批判を仰ぎたいと思う。

[附 記].

- 1、先にも觸れたように、私は、先に、「『心王經』について—ソグド語譯された禪宗系偽經—」（「駒澤大學禪研究所年報」第四號、一九九三年三月）という一文を草し、『心王經』の意義などについて論ずるとともに、『心王經』の復元漢文を掲げておいた。本稿は、その際の還元の根據を示すために書かれたものであるが、ソグド語譯の還元漢文を検討し直した結果、先の拙論に掲げた還元漢文の一部を改める必要を感じるに至った。そのため、今回の復元漢文には、先の拙論に掲出されたものとの間に多少の相違が見られるが、今回のものが現時点での結論であると御諒解頂きたい。
- 2、神戸市外國語大學の吉田豐氏には、いくつかの點について、貴重な御示唆を頂いたことを、再びここに記して、感謝の意を表したい。

（本論は文部省科學研究費補助金による研究成果の一部である）